

株式会社へと香港編

瑞希のライバル？クォーターの長身美女、黒崎 衣舞（イブ）登場、香港では有華も合流、パワフル美女3人に囲まれて、今回は裕也が主役？

海外のホテルや会社は実際にある名称を使っています。

Welcome to my life 2.

著者 バンコク かじ

日本会社編

まるで、台風のような有華が帰ったあと、しばらく俺たちの生活のための仕事は大きく変化しなかった。

俺の方だが、今までどおりにリムジンタクシーの運転手として、遅くまで残業、休みも土日はめったに休みが取れない。

このために、瑞希と会える時間は極端に少ない。

俺は仕事が終わってから、6畳一間のアパートで瑞希にメールを書くのが日課になっている、お互い時間がうまく合わないのでほとんどの連絡はメールで済ましている。

携帯端末を使っただけで、連絡は緊急を除いてしないことに、彼女の話では、あとから全ての通信記録はトレースできるので、今後、行政とトラブルがあった場合、なにかと不利だそうだ。

国民管理部門にいる彼女の意見だから確かである。

だから連絡は、メールの暗号化したファイルで行っている。

話したくなったら、IP電話の音声スクランブルで話すか、直接会えば良いのだが、仕事の関係でお互いの時間が合わないのが一番つらい。

本当は、毎日でも話したい！会いたい！で言いたいんだけど、そんなこと俺からは言えない。

メールの内容は、オーガニックフード（農業株式会社）の経営に関することがほとんどだ。

彼女は、一応週休2日なので、休みの日は、情報収集、分析、リーさんと>Contactしてアドバイスをもらっている。

俺より、リーさんと会っている時間が多いのがちょっとしゃくに障る、これって嫉妬かな？

あと、彼女の上司・・・だれだっけ？俺名前知らない、訴えられられなかったので免職にはならなかったらしいが、外交官とのトラブルについての報告が役所に行ったらしく、メガ札幌へ飛ばされたそうだ。

やっぱり有華を怒らせないほうが得策だ。

会社経営をすることになっているのだが、まだ会社に直接乗り込んだわけでもないの

で、実感がわかないし、このことによって収入が増えたわけではない。

この半年間はなんとか時間を作って、今後の方針や事業内容についての資料まとめ、勉強ばかりやっている。

この会社、今の時点で黒字である、良質な米をメインに栽培している、消費先は国内でなく海外がほとんどだ、これは、世界的な日本食ブームが続いているせいと、米の栽培は麦の200倍(色々な計算方法がある)の水が必要なため、高くても良質な米は日本の輸出品でとして有名になっている。

ただ、日本の株式会社は儲けのほとんど株主に配当する、現時点では事業の拡大は難しそうだ。

俺は家に帰ると瑞希のメールをいつものように、開いた。

まずは、暗号化ファイルを解除する。

「えーと、パスワードは2501と」

ファイルがPCのフォルダーに展開される。

解除されたファイルは、資料が12ファイルとメール、またいっぱい宿題が来たようだ。

瑞希のやつ、俺が忙しいことわかっているのに色々やれと言ってくる、それを楽しんでいるのか?と思いながら、メールを開いた。

“ 裕也、元気! 今度の月曜日は休みだったわね ”

“ 私、休みを取るから、デートしない ”

俺は、ここまで読んで小躍りした。

毎日メールしているとは言え、この半年、瑞希と会ったのは15回ほどだ、これでは東京・大阪の遠距離恋愛より少ないのではないかと、自分では思っている。

“ 朝10時にメガ東京足立区鹿浜の都市農業サイトにあるオーガニックフード本社オフィスMDコファレンスルーム ”

次を読んで、がっくりした・・・なんだ仕事じゃないか、近日中に行くことはきまっていたが、俺は不機嫌になった。

しかし、コンピューターの前で、怒っていてもむなしい。

“ 資料を全て読んで、頭に叩き込みなさい、とても大切なことを決めに行くのだから ”

“ 当日は、私とリーさんも行くから、背広着てネクタイしてきてね ”

全然楽しくなさそうである、行くのをすっばかしたら怒るだろうな、とぼやくのは嘘だ、やっと次の段階へ進む時がやってきた。

“ けれど、その前に打ち合わせしないといけないので、日曜日仕事が終わったら、私のマンションに来てね ”

“ 夕食作っておくから、食べながら話そう ”あと最後に小さくこう書いてあった“ 注意: 着替え忘れないように ”

俺はさっき不機嫌だったのを全て忘れて、上機嫌になった。

これって、うまくコントロールされている??この時は微塵も思っていなかった。(男
って単純)

一方、瑞希はマンションに一人で住んでいる、8階建てのマンションで501号室、
角部屋、普通のサラリーマンの給料では買えないマンションだが、親からの相続で、彼
女の唯一の財産である。

瑞希は、お風呂に入りながら、独り言。

「明日は買い物に、行かなくてはね、私の持っているスーツはリクルート用と通勤用、
あまりみすばらしい格好では行けないしね」

「裕也もバーバリーブラックレーベルのスーツと言うわけにはいかないと思う、サ
イズはわかっているので、彼のスーツも買いに出かけよう」

ほっとしながら、お風呂に入っているが、ここまで来るのにはとても大変だった。

“オーガニックフード”の取締役会とコンタクトを取るのでも、リーさんが仲介に入
ってくれなければ、最初から反感を買っていたらうし、こんな小娘と若造が乗り込ん
でもだれも言うことを聞いてくれないのは明白だったと思う。

仕事を終わってから、調べ物や資料作り、裕也とのコンセンサス、リーさんとミーテ
ィング、特にリーさんは私たちのために多くの時間を割いてくれた。

色々なネゴシエーションを経て、やっと取締役会へ参加することになった。

有華も大変な物を押し付けてくれたわ、でも楽しい自分の未来を作るためだから、寝
る時間と休日のほとんどを、このことに費やしてもそんなにつらくなかった。

今の彼女が住んでいるマンションは、彼女の親が残してくれた物だ、先の国家破産の
時に、都内の不動産は高騰、相続時に金額の70%にもなる相続税が必要だったが、2
軒分の家を購入してしてくれたおかげで、一軒を売り、納税、残ったお金を使って大学
を出た、そのときの大混乱で彼女の両親は強盗によって殺害された、当時は警察機能が
麻痺したので、しばらく強盗殺人は日常茶飯事だった。

不動産の税金は意外と安い、外資が各都市のビルを所有しているのが原因で、日本国
政府は海外からの圧力で、不動産に大きな税金を掛けられない、持てる者と持てない者
では暮らしやすさが違う、金持ちや資本家が有利な国になってしまっている。

有華に会わなかったら、私は未来を描くことが出来ないまま、だまされて没落する
ところだった、弱肉強食の社会では、弱者はいつまでたっても搾取される立場になる。

今の時間は夜中の2時、ここのところ本当に睡眠時間が少ない、もう寝よう。

朝、7時、端末の目覚まし鳴り、眠いが気合を入れて起きる。

今日は、楽しい買い物、有華から別れるときにもらったお金はまったく手をつけてい
ない、今後何があるか判らないし、降って沸いたお金を使うことは、自分が墮落しそ
うだったから。

「だけど今回は使っても良いわね」自分に言い聞かせる。

朝は、ミールバーと水、本当はご飯とかパンを食べたいのだが、高くてもったいない。

ミールバーはビスケットのような食べ物で、一食分の必要な栄養価はある、しかし、原料は芋や輸出できなかつた規格外の米、加工野菜（言い方を変えると、クズ野菜）、プランクトン（オキアミ）で本当に体に良いのか？疑問である。

自然な物は金持ちが食べる、低賃金で仕事に追われる人たちは、こう言った加工食品やパック食品がほとんどで、時間とお金が節約できる。

ちょっとはまともな服を着て外に出る、交通機関は電車が使えるが、値上げをして高い割には、メンテナンスは良くなく、頻繁に小事故が起きている。

ここでも、利益は海外に流出して行くようになっている。

「ネットで下調べをしたので、行き先は決まっている。

電車で30分ほどかかるわね、電車遅れていなければいいけど」

駅へ行くと、運行状況はまあまあようだ、遅れも15分程度。

昔、秒単位で動かしていたのは、なんだったのだろうと思えてくる。

端末が切符代わりになるので、利用は便利だが運賃以外にネットチャージを払う、企業はどこまで儲ければ気が済むのか、資本家から労働者への還元は少ないのに。

駅を出て、きれいなビルが並ぶ町を歩く。

金持ち外国人向けの商用ビル街へは、ほとんど来ないが、今回は少し高いもの買うので来てみた。

「意外と人が多いわね」やはりここを歩いている人は金持ちや外人が多いようで、みな良い身なりをしている、日本でもここだけは、なにか違う国のように見える。

10分ほど歩いて、高級ブティックのテナントが入っている目的のビルを見つけた。そのビルへ入る。

10mほど行ったところで、セキュリティ要員らしき格好をした女性から声をかけられた。

「お客様、どちらまで！」女性は制しするような言い方をした。

「スーツがいるので、アルマーニのお店に来たのですが」ちょっと言い方きつくない？と思いながら答える。

「私は、犯罪防止のために、チェックを行っています、失礼ですが、一般の公務員の方が来るお店ではないと思いますが」

判っているけど、入り口のセンサーで私の端末を読み込み、警視庁のファイルと照合して、職業まで確認されたいらしい。

「私はこのビルには初めて来ますが、別に買い物に来たのですから、問題ないでしょう」瑞希

「スーツ、いくらするか知っていますか、あなたの年収に近いのですよ」彼女。

まるで、なにも知らない、お上りさんに言うような口ぶりで、ここは貧乏人が来ると

ころではないから、さっさと帰りな！と言っているように聞こえる。

ここで、腹を立ててもしかだがない、彼女の言うことはもっともで、私のような公務員が普通に買える店ではない。

「いえ、お金はありますので、お店まで案内してくれませんか」ちょっと反撃。

彼女はやれやれという感じで「こちらです」と言って歩き始めた。

「職業や身なりで、そのお客に対する対応はひどくありませんか？」瑞希

「買う気の無い客は、お客ではありません、ここは外国の方も大勢来られます、イメージダウンはお店にとって損失なのです」彼女は歩きながら、言った。

「ひどいわね、あなたもわたしもそんなに違わないと思うけど、自分でいやな気分にならない」私はちょっと意地悪？

「仕事ですから」前向いたまま。

警備を担当する会社は警察機構が半官半民でやっている、彼女も公務員のはずだ。

「ここです」そう言うと、さっさと戻っていった。

私は店内に入ると、店員がすぐに声を掛けてきた。

「いらっしゃいませ、ご用件が決まりましたら、お伺いいたしますので、ゆっくりご覧下さい」さすがに教育がしっかりしている。

「黒のスーツを買いに来ました、男性用と女性用の2着欲しいのですが」

「こちらになります、サイズを言っていただければ、応接テーブルにお出しいたします、デザインなど決まりましたら、私がお伺いたします」

店員は、さすがに私に対して変な顔したりせず対応している、正規社員ではないと思うが、マニュアルどおりなのでしょう。

「デザインはシンプルで、目立たない方がいいわね」瑞希

「今年のデザインで、こちらはいかがでしょう」けっこうシンプルだが、体にピッタリフィットしそうなものを持ってきた。

一応、スタイルは自信ある・・・自分で言うのは恥ずかしいわね。

私は家で自分のサイズを測ったメモを渡すと、ブラウスもここで買うことにした。

「男性物のお勧めは？」瑞希

「それなら、同じ今年のモデルが良いのでは、これですがサイズは？」店員はハンガーに掛かったまま、肩まで差し上げ見せてくれた。

「これなら、彼かっこよく見えそうね、派手ではないし」私はサイズを書いたメモを渡して応接のテーブルの前に座った。

「お飲み物お持ちいたしますので、何がよろしいでしょうか？」別の店員に聞かれる。

「え、それなら紅茶お願いできます」私はこう言うのに慣れていない、こんな高級な店に来ることなど考えたこともないから当たり前なのだが。

座って紅茶を飲みながら待っていると、女性用と男性用のスーツ、その他頼んだ物を持ってきて、テーブルに並べた。

「こちらは、ご試着なされますか？」女性用のスーツを持ち上げ見せた。

「ええ、着て見るわ、ありがとう」瑞希

試着室で着てみた、問題なさそう、一応全てのサイズを測ってきたので、店員が持ってきた服はそれに合わせて倉庫から持ってきたのだろう。

試着室から出てきた私は「私は、これをいただくことにするわ」「さて、彼のだけど、裾上げだけはやってもらわないといけないわね、どれくらい時間がかかりますか？」

「そうですね、今の時間なら1時間ほど待っていただければ、仕上がります」店員。

「待ちますので、お願いします」瑞希

「しばらく、お待ちください、明細書を作ってきます」そう言うと、店員は奥の事務所に入って行った。

しばらくして、店員が電子ペーパーに記入された明細書を持ってきた。

「内容は、これで間違いありませんか？」

内容を確認して、値段を見たら、内心はぎょっとしたのだけど、ここは顔に出さず。

「問題ないわ、290万新円ね」平気な顔で言ったが、私の年収2年分に近い。

(余談ですが、今現在バンコクの高級デパートで25万円のブランドスーツを買ったとしますと、その店員の1年分の収入と同じです)

「お支払いは？」店員。

「現金でいいわ」私、店員ちょっとひるんだ、ローンだと思っていたら。

現金と言っても、電子マネーなので札束を数えるわけではない。

「かしこまりました、少々お待ちください」そのまま、事務所へ戻っていった。

すぐに、店長のような人を連れてきた。

「このたび、お買い上げありがとうございます、私フロアマネージャーの小阪と申します」「良ければ、お直し時間を取らせていますので、あちらの応接室までご足労願えませんか」40歳ぐらい男性に言われた。

昔なら、そんな高い買い物ではないだろうが、新円が安くなっている現在、こんな買い物はそんなに多くあるものなのだろう、さっきのせせキュリティー部門は私の端末から、職業を照合できるが、それを教えるのは法律違反なので、店の人間には私の素性は判らない。

今後のために、上客として対応したいのが透けて見える。

「かまいませんけど」どうせ1時間待たされるので、居心地が良い方がいい。

応接間に移動して、今度はお茶だけでなくケーキまで出てくる。

この国は、金持ちに優しい・・・

フロアマネージャーは、顧客リストに登録させて欲しいと言って、色々勧めていったが、また必ず来るので今回は見送ると言って断った。

だって、そんなことしたら、安月給の公務員ってばれる。

支払いは、その場でさっきの電子ペーパーを店用端末に読み込ませ、値段を確認、私

の端末で支払いボタンを押し「シャリーン」と電子音が鳴って終わり。

有華がくれたお金はまだ、たくさん残っていたが、このお金はなるべく使わないでおこう、今後は新しい仕事で必要になることもあるだろうから。

お店からは丁重に送り出された、ビルから出るときセキュリティの女性が居たので、ちょっと会釈、私は礼儀正しい。

「さて、お昼食べたら、晩御飯の材料買って帰るかな」

しかし、この紙袋（大きくブランド名が入っている）持って、家の近くで食べたらず立ちすぎるわね、と言ってもこの辺のレストランで食べたらず、高すぎて嫌になりそう。

「よーし、高級食材だけ買って帰ろう、お昼は家で」経済的な私。

この辺のスーパーマーケットは金持ち向けなので、肉・魚・野菜がそろっている、金持ちほど健康に気を使うので、添加物も少ない物や自然食品が並べてある。

下町、低所得層（下層）の方が子供の肥満多い、これは結婚しても共働きでないと暮らせないと、料理を作る暇も無いから。

おのずと、インスタント食品やファーストフードが主食になる、このため高血圧、肥満が下層に多くなっている。

食品業界も上層と下層を分けて製品を作り分けている、健康志向の高級品とカロリーが取れて味がよければ材料は何でも良い安い食品。

最近、下層にアルツハイマー病が増えているのは、味付けにUSAの牛骨粉を使っているからだとのうわさもあるがマスコミはなにも報道しない。

私は、加工品は食品表示を見てビーフ表示のものは買わない、ほとんど外資のものになってしまった食品会社は、日本人の健康についてのプライオリティが低いと思っている。

お店に入って、野菜と肉を買った、ついでに果物、高い・・・夕飯はすき焼きにしよう（すき焼きは料理ではないって突っ込まないでね・瑞希）

少しだけワイン飲もう、年末なのでボジョレーヌーボの船便がある、この際だ、奮発！

え！？フルボトル1万5千新円って、どうしようか、清水舞台で行けー！買ってしまった。

昼は、インスタントラーメンにしよう。

家に帰るとまずは昼食、と言っても情けないのでこれ以上の説明は抜き。

明日の、資料をもう一度読みながら、本当にこの企画が通るのだろうか？

その前に、追い出されるのか？

しかし、うまく行けば未来が開ける、リスクはあるが有華が言ったように私たちのリスクは少ない、ほとんどのリスクを彼女が抱えている、今までリスクを取らなかった庶民はことごとく没落した。

ここまで来たら、有華に甘えてもいいわよね。

資料を全てチェックして、番茶を飲んでいたら、パソコンのIP電話のコール。

IP電話してくるメンバーは決まっている、見たら有華だ。

有華は私にだけ、電話をよく掛けてくれる、裕也が聞いたら怒るだろうな。

早速オン、スクランブル音声と衛星リンクなので、微妙に遅れが出るが、会話には支障が無い。

「ハロー、瑞希、元気！」有華

「ハロー、元気にやっているわ、そちらこそどうなの？」瑞希。

「元気よ、いよいよ明日ね、がんばってね」リーさんから、連絡が行っている所以她は明日のことを知っている。

「ええ、今晚、裕也と打ち合わせするの、彼には相当勉強させたけど、大丈夫かな」瑞希

「あなたが選んだ人でしょう、大丈夫だと思うわ」有華

選んだと言うより、有華に押し付けられたような気もするのだが・・・

「本人は、頭でわかっているのだけれど、複雑みたいね」瑞希

「これが通ると株価が下がるので、そのときにもう一段と買い進めるわ、その後に期待しているから」有華

「わかった、ここまで来たし、やってみる、リーさんもバックアップしてくれている、なぜあそこまで肩入れしてくれるのか少し疑問だけど」瑞希。

「彼も、投資でこの件に絡んでいるの、利益が出ればいいのよ、インサイダーにならないよう、株の買い付けは海外から行っているけどね」有華

「そうなの、ちょっと複雑な気分ね」瑞希

「それより、これがうまく行ったら、次のステップへ移行するのでしょ、期待しているわよ」有華

「え、何のこと？」瑞希

「彼と一緒に暮らすこと、結婚は別にして、2人でそのマンションに暮らした方が経済的でしょ」容赦なくプライバシーに突っ込む、有華

瑞希は、パソコンの前で真っ赤になって、だまっていると。

「2人の結婚式に私を呼ぶことは一番の約束、破ったら怖いわよ」ってそれ脅迫だよね。

「彼の気持ちも有るし、急ぐと怖い気もする」瑞希

「そんなこと言っていると、裕也取っちゃうぞ！」いじわる言ってくる。

彼女がそんな気になったら、裕也はイチコロだと思う、しかし冗談よね。

「冗談はさておいて、その件が片付いたら、香港に会社1つと口座を作りに行くのよ、その時、再開しましょう、グッドラック」言いたいこと言うと、有華は電話を切った。

「まったく、また振り回されそうだわ」少し、うれしいけど。

「彼の性格だと、自分から一緒になろうなんて言わないし・・・」なに考えているの私。

夕方近くになり、野菜を洗って切り、その他の材料を用意、グラスは・・・楽しい。
こんな、ことしているのって、両親が健在だったとき以来。

さて、服は何を着ようか。

午後7時、部屋のベルが鳴った。

玄関のモニターを見ると、裕也がバーバーリーブラックレーベルのスーツを着て立っていた。

私は、ドアを開け「その姿、最初に会ったとき以来ね」

「きみこそ、ディオールドレス着て、どこのパーティーへ行くのだい」裕也。

これで、すき焼き食べたらいメージ合わないよね・・・仕方が無いか、おしゃれな服って他に持っていない。

男の人を、食事に招待するのは初めてだ、ましてや2人きり。

ちょっとどきどきしている。

ちょっとぎこちなく「入って、食事を用意してあるわ」

彼は、ちょっとテレ気味に入ってきた「へーけっこう大きい家だね」

3LDK、75㎡標準的なマンションだが、今の私たちの世代では、とても大きい。
「俺のアパートは1Kと言えば、聞こえがいいけど、6畳の部屋とキッチン、ユニットバス、さすがに主任が狙っていただけあるね」

そう言ったら「その話、やめて！」にらまれた、軽い冗談のつもりだったけど、やっぱり俺ってデリカシー無い。

「ごめん、あまりにもすごい物だから」今の時代は普通のサラリーマンだったら、一生かかっても買えないマンションである。

「今日は意外と早く来ることが出来たのね」瑞希

「残業サボった、どうしても出来ないって、言ったら、正規社員から外すぞって、課長怒っていたけど、無視して来たよ」俺

「大丈夫？まあそれも良いかもね」笑う瑞希。

そんな軽口たたけるのも今だからだ、こんなことになるとは思っても見なかった。

思えば、半年前に空港で拾った女の子が天使・・・もしかすると小悪魔だったのかも。

キッチンのテーブルの材料を見て「うわー、豪華、生の野菜に牛肉こんなに買って大丈夫」

「今日のために奮発したの、半月分の給料が飛んだわ、今後は絶対用意しないわよ」

「とりあえず、乾杯しましょう」ボジョレーを出した。

「これって、今後はもう無いのか？」裕也

「そう、こんなにもったいないことしないわ」

食事をしながら、お互い明日の確認をする。

“オーガニックフーズ”

正規社員90人、50歳以上の派遣社員を4000人抱える中企業。

本社は東京足立区の農業モール、賃貸のビルを使用。

本社には30人勤務、後は各農地サイト8箇所働いている。

創業者(会長): 黒崎 文隆 60歳 14%株式所有

社長 : 東 幹夫 57歳 5%株式所有

小さい会社なので、取締役会はこの2人。

本社機能は、ビジネス判断、全体の経理、各サイトの生産計画、輸出部門、営業、サービス部門、開発部門である。

資産総額 7億新円

直前期末1年取引 20億新円

今の問題は、株主配当に黒字のほとんどを持っていかれるので、次の投資が出来ていない。

今回は、この点が重要である。

今までのコンタクトでは、創業者と社長は我々の考え方に賛成しても良さそうと言う雰囲気になってきている。

「でも彼らは、私たちのことを疑心暗鬼に思っている」瑞希

それはそうだろう、最初創業者は60%の株式を持っていたが、日本の崩壊でほとんどの株を手離さなければならなかった。

彼らは、全ての私財を投げ打って、今の株を持ち続けて自分たちで経営をしている。

そこへ、海外の投資家が41%の株式を購入、委任状を持たせた若者2名を経営に参加させろと言ってきた。

最初は突っぱねていたが、株式会社である以上、そのまま断り続けることは出来ない。明日、会ってお互いの気持ちや、本音を話そうということになった。

「裕也、明日、堂々と話してね、消極的ではうまく行かないと思うわ」瑞希

打ち合わせの後、ソファで2人並んで話している。

「ちょっと怖いな、相手は相当年上だし、こんな社会を運営しながら大変な時代を乗り切った人達だ」

「私たちの提案は、彼らにもプラスになる事なの、全然気にすること無いわ」瑞希

彼女は俺の手を握って、俺を見た……

しばらくこのままでいたい……

さて、一方の黒崎氏と東氏は日曜日にもかかわらず、会社の社長室に居た。

黒崎氏はけっこう恰幅のよい体系で、大柄である、学生のころから農業を会社化して、なんとか日本の農業を活性化出来ないかと言う夢を追ってきた。

社長の東氏は小柄な体格で、黒崎氏の大学の後輩、一緒に資金を出して同じ夢を追っ

てきた。

まあまあの利益が出せるようになったとたん、日本の崩壊、株は暴落、会社の運転資金のため、ぎりぎりまで株売って、どうしてもダメな資金は家や土地私財を売ってなんとか持ちこたえた。

崩壊後、安い労働力を使って、なんとか黒字にしているが、株主の要求は配当金一点張りで中期や先のことなんて考えていない。

持ち株は多くないが、他の株主は分散しているのと経営にはあまり興味が無く、興味は毎年の配当だけなので、彼らがこの会社動かしている。

しかし、最近の派遣社員の生活を見、社会の環境を見るにつけ、本当に会社が社会の役に立っているのか、考えさせられる。

ここへ来て、この会社乗っ取りのような事件が起こった。

本社の部長・課長(6人)までにしか、情報を下ろしていないが全員、騒然とした雰囲気でカリカリしている。

「今回の話は、私に香港の証券会社の社長からコンタクトがきた、2人の日本人を経営に参加させて欲しいと」黒崎

「彼らは、41%の株式を所有する株主から委任状をもらっていると言っている、つまり全ての議案に対して拒否できる権限がある、会社の経営に携わるメンバーの入れ替えは簡単に出来ると言う事だ」黒崎

「普通だったら、こんなに時間掛けて、我々に提案をしてくないですよ」東

「そこが解せないところだ、外資だったら、金儲けしか考えてないからこんな提案をしてくるわけが無い」黒崎

「彼らから提出された、資料を読みましたが、よく出来た内容ですね、うまく行けば飛躍的に業績が伸びる、ただ、メインバンクが乗ってくるか」東

「社員の反応はどうなのだ、ある程度は話したのだろう」黒崎

「ええ、課長以上にはこの話しました」東

「で、みんなはなんと言っている」黒崎

「いまどき、こんな株主は居ない、なにか裏があるのではと言う意見が大半でした」東

「内容だけでは、会社にとって大きなプラスなのだが、ただ経営に参加する2人が若すぎる、大学出て2~3年だろう」黒崎

「そうなのです、今回のプランでも、彼らだけで考えたとは思えない、バックには何かありますね」東

「私はこの会社が必ずしも社会の役に立っているとは思っていない、利益は海外へ持っていかれて、社員は派遣も含め裕福な生活をしていない、今の体制からなんとか脱出したいとは思っている、この提案はすごく魅力的なのだが」黒崎

「明日来る、委任者を見てから決めましょう、と言っても彼らが株主票を振りかざせば、拒否できないのですが」東

乗り込まれる側は、憂鬱なようである。

月曜の朝、7時に目が覚めた、ここは瑞希の家だ。

瑞希はもう起きていて、ベッドにいない。

起きていくと、瑞希が朝食用意していた。

「おはよう」俺が言うと瑞希も「おはよう、朝食簡単だけど作ったわ」

今朝は、フードバーとかドリンクは無し、小麦粉で作ったパンとミルク、これも奮発した。

「一緒に食べようよ、こんな風に食べるのは何年ぶりかしら」

「なにか、新婚みたいだな」ぼそっと俺

「うん、たべよ・・・」ちょっと照れる瑞希

食べながら瑞希が「後片付けは手伝ってね、昨日の食器も洗っていないし」

「うん、手伝うよ」今の男で、拒否するやつなんていないだろう。

食事の後、2人で片付けを終えると、瑞希が「あなたの服買ってあるわ、サイズ間違いないはずだけど、着てみて」

「私とおそろい、アルマーニのスーツ、黒だから派手ではないわよ」

二人で着替えて、並ぶとけっこう様になる。

瑞希が化粧をしていると、部屋のベルが鳴った。

特別という事で、リーさんが9時に彼個人の車を回してくれることになっている。

「さあ、行きましょう、大切な日よ」瑞希

「俺、緊張するなー」

車を持ってきてくれた人から電子キーを受け取り駐車場まで行く、リーさんが貸してくれた車はSUVだった、たしかポルシェ・カイエンと言う車だ、この車コスト無視なので、昔のマツダが開発した水素ロータリーエンジンで発電機を動かし、リチウム電池をメインに4つのホイールインモーターで走る、ボディーは太陽電池が埋め込まれているので、輝くブルーだ、エンジン掛かっても、ほとんど音がしない。

すごい、こんな派手な車で行けというのか。

キーをポケットに入れたまま、助手席へ行って、タッチパネルに触れると助手席のロックだけ外れる、ドアを開けて瑞希を乗せる。

運転席に回り、タッチパネルに触れ、運転席のロックを外して乗り込む、昔は運転席のロックを外すと全ロックが同時に開いたが、セキュリティー上、運転席に座ってコントロールする場合のみ、他のドアロックをリモートで開け閉めできる。

シートに座ると、シートヒーターが適温まで、瞬間に温度を上げてくれる。

「リーさんは、社用車で行くって」瑞希

「行こうか」俺は車の運転慣れているが、こんな車は初めてだ、慎重に行こう。

フロントパネルの横にあるボタンにタッチすると、計器類とナビゲーションのモニタ

ーが点灯する、パネル全てが無機ELモニターだ。

車が「安全チェック完了、準備完了です、どちらまで？」と聞いて来る。

俺が会社の電話番号を言うと、車が復唱し「間違いありませんか？」と聞くので「OK」と言ったら、ナビゲーションが会社名と住所を話してから、スタート画面になり案内を始めた。

アクセルをそっと踏む、車は音もなく動き始める。

燃料電池で水素から直接電気を取る車も開発されたが、変換パネルに貴金属が多く必要で台数を作るには電池と発電機を備えたハイブリッドが良い。

この車は、必要になれば、ガソリンでも発電機のエンジンを動かせる設計になっており、水素ステーションの整備されていない国でも走ることが出来る。

運転していて、快適だ、少々路面が荒れていても気にならない。

少し郊外へ出ると、バラックが目につく、収入が少なくなれば、インフラの整っていない場所に住まなくてはならない。

定年退職した人達のほとんどが、アパートから追い出される。

会社には15分前に到着、平屋の社屋で汚くはないがちょっと古そうな建物だ。

門のセキュリティーで端末をチェックされ、建物の玄関横にある、お客専用の駐車場所へ行けと言われた。

瑞希と車を降りる、リーさんはまだ来ていないようだ。

玄関へ行こうとしたら、中から俺たちと同じくらいの年齢か？背の高い女性が出てきた、俺と同じくらい背がありそうだ。

「お待ちしておりました、こちらへおいで願えますか」丁寧に案内された。

「こんにちは」「よろしくお願いします」瑞希

「よろしく」と俺

「はい、こちらこそよろしくお願いします」「私は社長秘書の黒崎と申します」

創業者と同じ名前、関係者かな？瑞希は思った。

応接室に案内された、高級品ではないが、テーブルや椅子、置いてある物は無垢材のセンスが良い家具だ。

部屋の外では、すぐに集まってきた社員がざわざわと相談しているのが判る。

「なんだ、あいつら、変な車に乗ってくるし、すごく若かいじゃないか」

「あれって、ポルシェじゃないが、普通の人間は乗れない、すごいなー」若い社員

「どちらも、清楚な感じだけど、どっかの金持ちの子供？なの」

しばらくして、リーさんが来た。

彼は、社用車に乗ってきたらしい、黒のレクサスLS700HVが止まった。

「今度は、中国人だよ、やっぱり会社乗っ取られるのか」

応接室では、秘書が緑茶を出して持ってきた。

「これは、この会社で栽培している新茶で輸出用です」秘書

「いただきます」瑞希

「美味しい、ずいぶん和本物の緑茶は飲んでなかったわ」瑞希

「本当だ、日本にこんなに美味しいお茶があったんだ」俺

秘書さんは冷静に分析、お茶の反応を聞く限り、根っからの金持ちではなさそう、調べた情報は合っていそうね。

「さて、行くかね」リーさんが立ちあがった。

秘書の黒崎さんに案内され、MDコンファレンスへ、20畳ぐらいの部屋に、PC用のプロジェクターがあるくらいで、普通だ。

「会議を始める前に、私が紹介いたしましょう、私はどちらか言うとオブザーバーですから」リーさん

裕也から紹介、名前と年齢、そして瑞希。

創業者の黒崎さん、社長の東さん、ここまでは資料を見ているから判っている。

ミーティングミニッツをPC打ち込んでいる、秘書の黒崎 衣舞（イブ）さん。

「細かい探りあいはやめましょう、先に渡している資料で我々の意図はわかっているはずです」「裕也くん、説明したまえ」リーさん

俺は、さっそく振られるとは思わなかったので、ちょっとどきっとしたが、昨日練習したとおり、プレゼンテーションを始めた。

概略はこうである。

最初に株の配当を現在の1/10に下げる。

残りの利益を担保に融資を受け、エタノール生産プラントに投資する、タイで行われている水素触媒の本格稼働はまだ5年以上かかるので、世界的なエネルギー不足に対応した戦略を行う。

沖縄のサトウキビ畑の拡張と買収、そこの中心にプラントを建設する。

米の籾殻・藁をアルコール化する技術の開発、基礎は出来ているが、量産技術を1年以内に立ち上げる。

信条 裕也を専務として、このプロジェクトのリーダーを任せる。

これが、我々の願いです。

「最後に、私たちの41%の株式とそちらの19%の株式で過半数を超え、残りを集めても拒否が不能になりますので、そちらが問題なければ、すぐにでも進められます」

「この発表で株価下がる可能性があります、下がった時点で買い増しします」

ここで、プレゼンテーションは終わり、会話に入る。

「私たちは、実際には選択権がない、しかし、貴方たちを信用できるかが最大の問題だ」黒崎氏

「まかせたとたん、会社を解体して売ってしまうことも可能だ」東氏

「半年間、時間をかけてコンタクトしてきた貴方たち、今回の提案も会社にとって好

条件だ、従業員にも十分メリットがある、受けない方がバカだとは思う」黒崎氏

「東くん、決断しようではないか、この話乗ろう」黒崎氏

「判りました、黒崎さんがそう言うなら」東氏

「すまんが、一つ条件を付けさせてもらえないだろうか、条件付けられる立場ではないが」黒崎氏

「今、ここに居る秘書は私の孫だ、アメリカの大学で経営学を勉強してきた、彼女はクォーター、私の妻はイギリス人だった」そこで、一息おくと

「彼女を君の専属秘書にしてほしい」黒崎氏

「つまり、監視役を付けたいってことですか！」瑞希、ちょっと不満そう。

「彼女は私が言うのも変だがとても優秀だ、それにこんな田舎で仕事しているより、君の仕事を手伝った方が面白いだろう」黒崎氏

「それは、かまいませんが」と俺、言った瞬間、瑞希に足踏まれた・・・後が怖そう、もう少し俺を信頼してくれ。

「よし、決定だ」リーさん決めちゃった。

「私は、公務員の仕事を続けるけど、今後の展開によってはサポートに回るわ」瑞希

「私は大丈夫ですよ、ハードな仕事でもこなすわ、徹夜でもOKよ」衣舞

瑞希と衣舞の間に稲妻が走った。

黒崎 衣舞、普通急にこんなこと言われたら、混乱するのに、ドライな対応、どんな人なのだと、俺は考えた。

なんとなく女の戦いが始まったような気がするが、俺は瑞希だけだ・・・しかし、衣舞さんって美人だな～。

リーさんは、仕事があるので会議が終わると帰って行った。

昼は、お弁当を取ってもらって、応接室で食べることに、そこで、衣舞から入社手続きの説明とか書類の話を聞く。

「今の会社、辞めないといけないわね」瑞希

「辞表、端末で書いて、明日会社へ行ってくる、端末に承認ID要りそうだし、端末の登録も変更しないと」裕也

「それでは、私が全てのデータを作成して会社用端末にセーブしておきます、明日その会社へは私も同行いたしますので、手続き任せてください」衣舞

「私は仕事だから、お願いするしかないわね」瑞希

今後の打ち合わせと、部門長へ挨拶をして、帰るのが午後6時になってしまった。

帰ろうとしたら「今日、夕食を用意していますので、来て頂けませんか、会長が是非と言っていますので」衣舞

「断る理由はないので、行きましょう、私たちはどこへ行けばいいのですか？」瑞希

「ヒルトン東京ベイズの地中海料理を予約しました、車でしたら、電話番号はこれです」衣舞にメモを渡された。

「では、行こうか」俺

「あの一、良ければ私もあの車に乗せていただけませんか」遠慮気味に衣舞

俺はちょっと瑞希を見たが「まあ、移動の手間は同じですから、かまいませんが・・・」
ちょっと語尾が弱気な。

「多い方が楽しいわ、一緒に行きましょう」瑞希

さすが、俺の見込んだ女性・・・でも後でフォローいるな、これ。

衣舞は明るい声で「あしがとう、すぐ着替えてきます」

しばらくして、制服から私服を着た彼女が来た。

ブランドではないが、仕立ての良いスーツ着ている、小さい会社とは言え、お嬢様なのだろうな、日本破産がなければ、相当な資産家の娘なのだろう。

ついつい、タイトのミニスカートから覗く長い足に見とれていると、瑞希に「早く！」と睨まれた。

車まで行くと、衣舞さんが、目を輝かせて「すごいわね、この車もう日本に入っていたなんて」

「これは、借り物なんだ、さっきのリーさんの車」俺

衣舞はフェンダーなでながら「ソーラー電池と水素エンジンで発電して、リチウム電池をメインに利用、1機300KWのモーターを4つのホイールに搭載、4輪のトルク配分を自動で行い、オフロードも電磁サスペンションで車高を自在に変え、高速で走れる、こんなの運転してみたい」

この人目が潤んでいるよ、もしかして車おたく？

先に後部座席のドアを開け、ちょっと不満そうな衣舞さんを後ろに乗せ、助手席へ瑞希。

俺は、車のスイッチをONにすると、さっきもらったメモの電話番号を告げて、行き先を確認、ナビゲーションが言うには、40分で着くそうだ。

「この車、0発進100Kmまで5秒、最高速度270Kmオーバーのスポーツカーなの」聞いていないのに話す、衣舞

「衣舞さんは、車好きなのね」瑞希

「私は高校の時からアメリカで車を運転していたの、こんな高級車ではないけど、日本がこんなになって、会社が大変にならなかつたら、アメリカにいたかったわ」衣舞

途中、衣舞にせかされて、高速の直線でパワー全開してみた、首がのけぞって、あっという間に200Kmオーバー、怖くなってすぐに減速、今の日本、車は少ないとは言え、この車を日本では走らせるのはもったいない、運転免許と命がいくらあっても足りないと思う。

「もう！むちゃしないでよ、裕也と心中はごめんだわ」瑞希、さすがに200Kmオーバーは怖かったらしい。

「すごいわ、私・・・」声が上ずっている、衣舞

ホテルに到着、カードキーをホテルマンに渡して、降りる。

衣舞はまた、ボディーなでてる、美女を2人も連れて、この車で乗り付けるのだから目立って仕方がない、ロビーに入るときは注目をあびてしまった。

衣舞が予約した名前を言って、端末で確認。

「承っております、アチェンドのプライベートルームで用意させています」レセプション

ボーイの後を、3人で歩く、俺は180cm、瑞希は168cm、衣舞はパンプス履いていて俺と同じくらいなので、175cmぐらいだろうか？

「祖父も奮発したわね、私が日本に帰ってきたから、ここへ来るのは2回目」「家も資産があったとは言え会社維持するのに、私財を出しているの、よほどあなたたちのこと気に入ったようね」衣舞

先に出発していた、黒崎氏は待っていた。

「よく来てくれました、さあ座ってください」

前菜から始まって、スープ、お酒は無し(お酒飲んでいるとセンサーに引っかかって車は動かない)

ここで、黒崎氏から、もう少し彼の家族のことを聞かされた、奥さんは現在別れて、イギリスに帰ってしまっていること、衣舞の両親はアメリカに住んでいて父親は貿易の会社に勤めている。

さすがに、サラリーマンなので、こちらの会社に対してはなにもバックアップはしてないらしい、けれど、衣舞は会長に頼まれて日本の会社へ乗り込んで来たとのこと。

俺たちは、話せる内容がない、家族は居ないし、公務員と安サラリーマンだ。

「失礼を承知で聞かすが、君たちのバックに居るリーさんと言ひ、株を買った人物が君たちを支持する理由が全然判らない」黒崎氏

「私たちは、この半年、必死で君たちのこと調べた、調べたのは衣舞だがね」

「海外からの買いであることは判るの、でも、その先は金融会社の極秘権の壁があって判らなかつたわ」衣舞

「半年前に、有華なる人物と会っていることまではわかったのですが、この人物、データがほとんどない、不思議な人物なのです」衣舞

俺たちはお互い見合わせた、さすが、相手もバカじゃないし、調べたのは衣舞だった、最初から彼女の対応がまともなわけだ。

「有華は、私たちの親友、そう、ただそれだけ」瑞希は自分で答えて、ちょっと不安になってしまった、だって、私は有華のことについて彼女が語ったこと以外、ほとんど知らない。

「実際は、あなた達がこんなに、下手に出てくるとは思わなかつたの、外資に買い取られて、解体して売られた会社は数知れない、ただ、うちの会社を叩き売っても、そんなに利益出ないと思っていたし、あなた達に会うまでは、不安で眠れなかつたわ」衣舞

「衣舞は、会社の経営を任せるつもりで、アメリカから呼んだのだよ、そこにこの話が降って沸いて、一時はどうなるかと思った」黒崎氏

「この話、ウエルカム、私は楽しくて仕方がない、裕也、いっしょに会社大きくしましょう」衣舞

「ちょっと、私を忘れないでね、私がパートナーよ」瑞希

「おいおい、仲良くしてくれよ、俺が一番困るだろう」裕也

「はっきり聞くけど、二人は恋人同士？」衣舞

「そ・・・」俺

「そうよ！」瑞希

「残念ね、これから長い付き合いになりそうだから、よろしくね、裕也」俺を見つめて言う、衣舞

こら、裕也を呼び捨てにするな、なにか危ない感じがする、この女気をつけよう、裕也に馴れ馴れしすぎる・瑞希

食事が終わり、帰ることに。

「も一度、あの車に乗せて」衣舞

「ダメ！もう帰るから」瑞希

「そう言う事だから、また」裕也

「それでは私は今夜中に手続きのデータ仕上げないといけないので、失礼します」明日の朝9時に、あなたの会社でお会いしましょう」俺に言うとさっさと衣舞は出て行った。切り替えが早い。

やりとりを見ていた、黒崎氏

「申し訳ない、アメリカで経営学を勉強させていたが、性格もアメリカ的になって、欲しい物は実力で勝ち取ることが普通だと思っている、やさしい娘なのだが、ちょっと強引なところがある、許してくれたまえ」

「なかなか強敵ね、作戦考えないと」瑞希の独り言

車は瑞希のマンションへ置き、キーカードは瑞希に渡した。

今日は、本当に疲れた、帰って寝よう。

別れ際、瑞希「あの一、聞いてくれる、裕也」

いつもの瑞希らしくない、言い方だ。

「裕也のアパート引き払って、私のマンションに来ない？」

「二人で住んだ方が、経済的だし、部屋、余っているし・・・」

俺は疲れた頭で、考えた、いや頭の中真っ白になって、なに言っているか判らなくなってしまった。

「ちょ、ちょっと待て」狼狽した俺はこれ以上言えなかった。

「考えておいて」瑞希は言うと、ボタンとドアを閉めた。

言っちゃった、ドアにもたれて、天井を見る。
本当なら、こんなこと言うのは、まだまだ、先のはずだった。
衣舞の存在が、私を押ししたのよね。

ドアの外の俺、どうすればいいのだ？
いかん、今日は、色々ありすぎて、頭痛くなってきた。
とりあえず帰ろう。
なんとか、家まで帰ったが、瑞希の言葉が気になって眠れない。
ついでに、衣舞の見つめた顔を思い出した・・・
天国なのか地獄なのか、しばらくしてなんとか寝た。

朝、狭いアパートで目が覚める、寒い、もう12月も終わりだ。
会社へ行って、辞表出さなくては。
顔洗って、朝食ドリンク飲んだ、これだけで1食分の栄養が取れるが、まずいし、このおかげで、下層の子供の顎に異常が増えたと聞く、人間は物を噛むのも必要だ。
いつもの、ワイシャツとスラックス、ネクタイをして上はジャンパーを着ると、会社へ出かける、実際は30分で行ける距離だが、電車の運行がうまく行っていないので、1時間前には家を出る。
電車はまあまあだったので、8時45分に到着。
職場に顔を出すと、課長がにやにやしながら「信条君、君は勤務状況が良くないとのことで、正規から外れて、サポートに回ってもらうことにしたから」
サポートと言うのは、予備のドライバーで、正規が仕事でいっぱいの際に携帯で呼び出される、歩合制なので、給料が思いっきり減る。
「そうですか」俺
普通の場合だったら、俺は動揺するだろうけど、平気な顔をしていると。
「あれ、どうしたの、私に何とかしてくれて、言うかと思ったのに」課長
「いやー俺、会社辞めることにしたので、問題ないですよ」
「え、そうなの、今やめると、もう就職なんて出来ないよ」驚く課長
「そういうことなら、引継ぎとかせずに、さっさと辞められるので、好都合ですよ」俺
「お前、どっかのタクシー会社に引き抜かれたな、どこだ、言って見ろ」課長が狼狽している。
「いえ、会社を経営することになったので、そろそろ、うちの秘書が来るはず、人事へ行きます」言ってやった。
人事と言っても、そんなに大きい会社ではないので同じフロアーだ、衣舞がけっこう派手なスーツ着てやってきたのが判る、色も派手なブルー、背が高いのと、足に自信が

あるのかまたミニスカートだ。

さすが、フロアーの全員から注目を浴びている。

「やあ、時間通りだね、あれから資料作ったら徹夜だったんじゃない、大丈夫か」俺

「ご心配ありがとう、大丈夫よ」衣舞

「さて、急いで手続きを済ませましょう」「人事の方ですね……」衣舞が説明を始める。

俺の元課長は、目が点になって、ぼーと衣舞を見ている。

ここに立っている衣舞は、掃き溜めに鶴って言葉が似合いそう、周りでは仕事にならないようで、見に来る男どもがいっぱいである。

人事部長に挨拶すると、これで終わり、今の会社はさばさばしたものだ。

正社員のなり手は、掃いて捨てるほど居るから、問題ない、それより、俺の横に立っている、秘書が目立ちすぎるようだ。

一応、衣舞と一緒に課長にだけは挨拶に。

「すみません、急に彼を引き抜きまして、こちらの仕事には支障がないと、人事からお聞きいたしました、申し訳なく思います」彼女は丁寧にあいさつすると、深くお辞儀をした。

「と、とんでもない、こんなのでよければ……」後が続かない、課長

ぴしっと立っている姿はパンプスもあるが、課長より背が高い、だれが見ても美女だ。

「社会制度の手続きは、端末で認証した時点で終わり、もうここには用がないわ」衣舞

「今日の予定ですが、午後1時から、開発部長と会議、3時から経理と資料作り、5時から農林産業省へ挨拶と食事、9時から瑞希さんも含めて経営ミーティング」

「ちょっと、待ってくれ、資料もなにも見てないぞ」俺

「今から昼まで資料を読むわ、車の中で説明します、会社へ行きましょう」衣舞
うわー、運転手よりはるかに忙しそうだ。

みんなの、注目を浴びながら、タクシー会社を出た。

「車を取ってきますので、ここで待っていてください」

「え、車あるのかい、中小企業では買えないだろう」

「古いけどまだ TOYOTAプリウスを所有しているの、ここに居てください」

しばらくして、キューンと減速発電の音を響かせて、白のプリウスが止まった。

ちょっと古いが、丁寧に使っているのと、メンテがしっかりしているのだろう、ボディーもきれいだ。

俺は助手席に乗り込む、いつもは、自分が運転手なので変な気分だ。

「ガソリン代高いだろう」俺

「そうね、でも経費で落とせるし、リッター40kmは走るわ」

彼女は、スムーズかつ丁寧に走らせ始めた。

「運転うまいね」俺

「この子は丁寧に走れば、ものすごく燃費がいいわ、整備は私自身が行っているの」
この子って、やっぱり変だ、また変わり者の女の子登場なのだろうか、有華と会って
から、変わった女の子に会う運命なのだろうか。

「1時間で会社に行けるけど時間的に昼食が必要ね、お弁当作ってきたから、会社の
そばにある公園で食べましょう」衣舞

やっぱり、変わっている、いまだき料理をする女の子は少ない。

「一時間の間に、このゼロハリに入っているパソコンを使って、資料を読んでおいて
ください」

ゼロハリのアタッシュケースを開けて、パソコンを出す。

俺たちが使っている、ポータブルなのとは違い普通のノートタイプでプレゼンテーシ
ョン用のプロジェクターも付いている、メーカーはエイサーか。

「資料には私が音声ガイダンスで、コメント入れてありますので、ヘッドホンを付
けてじっくり確認してください」衣舞

「この資料、いつ作ったのだ、今日の手続きと言い、ここまで来るとあきれよ」

「お褒め下さって、ありがとう」衣舞

会社の近くにある、公園、意外と整備と掃除が行き届いている。

彼女に聞いたら、この一帯は、農業株式会社が集まっていて、イメージ作りに公園を
作りメンテしているそうだ。

「社会がぎすぎすしてくると、こんな空間は重要だと私の祖父が提案したの」

ベンチでお弁当広げる、食材は良いものを使っている。

「このお弁当の材料はうちの会社の生産品、美味しいわよ」

「ほとんど輸出されて、良い物は国内に残らない、昔のコーヒーを栽培していた後進
国みたいなものね、なんとかしなくてはこの国」衣舞

それからは、毎日大変だった、やることがいっぱいある。

瑞希と衣舞がサポートしてくれなかったら、絶対こなせないだろう。

正月も仕事・・・土日の休みが瑞希といられるだけでもうれしいが、実際は仕事の話
で相殺されている。

忙しさに、まぎれて、瑞希との話忘れた。

今日の仕事が早く終わって、少し飲みに行くことにした、たまには羽の伸ばさないと、
もちろん一人だ。

秘書には、帰ると告げただけだ。

久しぶりに、飲んでちょっと酔った。

アパートに帰って来ると、あれ、電気点いている、おかしい、泥棒？俺の部屋で取る
物なんかない。

そーと開けてみると「待たせてもらったわ」衣舞がいた！

「お、おいこら、俺の家に勝手に上がるなー」「どうやって入った」

ぼろアパートとは言え、端末キーを使わずに、無理やり開けると警報が鳴って、警察が飛んで来る。

「大家さんに、婚約者だけど近くまで来たので、待たせてもらえないかって聞いたの」

「始めは、大家さんの玄関先にいたのだけど、大家さんの奥さんが用事で出かけるので、あなたの部屋の鍵、開けてくれたの」「私と旦那を二人きりにしたくなかったようだよ」

奥さんの、心理もわかる気がする、こんな女の子と旦那を一緒に置いておきたくないだろう。

心理分析している場合ではない。

「なにしに来たんだ」俺

「たまには、良い物食べさせてあげようと思って、材料持って来てあげたの」「健康管理も秘書の役目」めげない衣舞

「俺は、食事してきたから、帰れよ」

「ひどいわね、けなげに待っていた女の子を、こんな夜に追い返す気」衣舞
なんとかしてくれ・・・俺しかいないので、自分でなんとかしなくてはいけないのか

「玄関に立っているのも、なんだから、入ったら」衣舞

ここは俺のアパートだ、頭くらくらししてきた。

“欲しい物は実力で勝ち取ることが普通だと思っている”黒崎氏の言葉を思い出した。
こんな、美女にせまられたら、ほとんどの男はイチコロだろう。

おれは、瑞希が居る！そう、居るのだよな、いてもちょっとくらい・・・

ダメだ、ダメだ・・・俺は優柔不断に見られやすいが、そんな男じゃない。

玄関で、躊躇していると突然衣舞が立ち上がって、俺を抱きしめると、強引にキスをした。

逃げる暇なかった(完全に言い訳だ、この場合エクスキューズは通用しないよな)

かろうじて「帰ってくれ・・・」と俺

「いいわ、あなたのような人好きよ」衣舞

アメリカ娘は強引だ・・・俺、とんでもないことになってないか？

衣舞はそんなに未練なく、帰っていった。

寝られない、彼女の香水の香りと唇の感触が残っている、また小悪魔がやってきた。

次の日、会社に行くと普通に「おはようございます、今日の予定は・・・」衣舞

今日は、早めに逃げて、瑞希と会いたかった。

こう言う日に限って、夜遅くまで仕事だ、また襲われたら、逃げ切る自信がない。

11時、瑞希のマンションに着いた、行くと連絡してあったので、まだ寝ていないはず。

部屋のベルを鳴らすと、瑞希がドアを開けてくれた。

「どうしたの、急に、明日土曜日だから会えたのに」

「早く、話がしたくて」俺

応接間で、お茶を（今の会社で安く手に入るようになった）出してもらい、寝ずに考えたことを打ち明けることにした。

「俺、ここで暮らしていいか」

「なによ、急に、それは私が言い出したことだけど」赤くなって、下を向く瑞希

「ただ、結婚するまでは、部屋を別に貸してくれ、ルールは守る」これはぎりぎりの選択だ。甘えたら、なし崩しになってしまう。

「いいわ・・・、うれしい」うつむいたままの瑞希

こんな、しぐさがかわいい。

「でも、なぜ急に？」瑞希

「隠しても、ばれるから言うけど、秘書の衣舞、俺に気が有るみたいだ」

「そんなの、最初から判っているわ」瑞希

「もう、誘惑されたくないんだ」

「と言うことは、誘惑されたな！」瑞希するどい

「すぐ追い返したさ」キスされたのは絶対だまってよ、ばれたら怖い。

「判ったわ、明日引越ししましょう、どうせ大した荷物ないでしょ」

「じゃあ俺、帰るわ」

と言いながら、彼女の手を握って放していない・・・冬の夜は長いから問題ない。

土日、使って、引越し完了、もともと6畳一間だったので、荷物は一部屋に収まった。

前に使っていた、食器や家具は全て廃棄、日曜日に2人で追加の食器や机などを買に行き、お店では新婚気分のカップルのようでちょっと照れくさかったが、衣舞のおかげで決心できた。

端末にマンションの玄関と部屋のキーを登録する。

各部屋のロックは昔ながらのキーで、プライバシーはお互いに尊重することに。

これで、スムーズに生活できるはずだったのだが。

月曜日、どうしてもやらなければならないことがある。

「おはようございます」衣舞

「おはよう、今日これだけ事務処理を、お願いできるかい」資料を会社端末に送信。

「なんですか、これ」秘書の衣舞はさっと目を通すなり、俺をにらんだ。

「住所変更届けだけど、手続きしておいてくれないか？」ちょっとひるむ、俺

「判りました、これが今日のスケジュールです」端末にスケジュールを受け取る。

「全ての手続きは、ネット上で行えますので、午前中に終わるようにします、午後か

らメインバンクとの、交渉ですから昼食後、社長と銀行へ行くことになっています」衣舞はいい終わると、さっさと出て行った。

思ったより、リアクションなかったな、ほっとした。

融資の話が決まり、仕事の量がまた増えた、過労死させるつもりなのかと思うぐらい、会社経営ってなまやさしくはない。

木曜日、スケジュール確認

「瑞希さんとの打ち合わせは、平日では時間が無くて無理なので今後は土曜日にします」衣舞

「かまわないけど、瑞希はOKしたのかい」俺

「もう確認は終わっています」ちょっとにこっとしたのを見た気がする、いやな予感。

スケジュールを確認

土曜の所で目が止まった。

場所：プレステージ マンション 501

時間：9:00AM~

参加者：信条、吉田、黒崎

「ちょっと、待て、場所はともかく、参加者の黒崎って、おまえか？」俺

「これから先、毎週このメンバーで行います、問題ありませんね」衣舞

いやな予感が当たった、ダメと言っても無駄だろうな、どうやって瑞希を説得したのだ。

帰ってから、さっそく瑞希に聞くことに。

「瑞希、今日、土曜日のミーティングの話聞いたのだけど、了解したのか」俺

「うん、好条件だったし、今までみたいに、移動しなくてもいい、時間のロスも無くなるから」瑞希

衣舞からの提案はこうだった。

- ・ 外部で行っていた会議場を変更することにより、今まで使っていた会議室代の50%を瑞希に支払う。
- ・ 光熱費・雑費は会社経費で落とす。
- ・ ネット使用料は会社経費で落とす。
- ・ 会議日の食費も会社経費とする。
- ・ メンバーは3人だけとする。
- ・ 土曜以外は、会議を行わない。

「この好条件ならOKしたわ、このマンションの管理費や税金が全て賄える、結婚資金も貯めたい」瑞希

うーん、やっぱりお金に弱いのかな、だけどすごい好条件だ、普通なら絶対断らないよな。

衣舞は今までも、会議に参加していたから問題ないけど、わざわざ、こんな手の込

んだことやるのは何かありそうだ。

夜は仕事で遅いので、瑞希とは朝以外あまり話せないが、朝食は順番に作って一緒に食べる。

給料が増えたのと、俺の家賃代が無くなったので、最近は自然食品を食べている、会社で安く買えると言うこともある。

土曜日は、ご飯にお味噌汁、玉子焼き、今の日本では贅沢品になってしまっている。「今日は9時から、今までのシュミレーションと今後の進め方を話しましょう、リーさんと有華にも報告書作らないといけないわね、そろそろ衣舞に有華のことを話す時期かな？」瑞希

「仕事のことは彼女を信用してもいいと思う、リーさんも大丈夫と言っているし」俺
「有華にもメールで事の次第は報告しているし、彼女からも話していいと了解をもらっているわ」瑞希

9時少し前、部屋のベルが鳴った。

「彼女、来たわ」モニターを見た瑞希。

部屋のロックを、遠隔操作で開けて迎え入れる。

「おはよう、お邪魔するわ、車で来たので部屋番号と同じ駐車場へ止めたけど良かった」衣舞

肩から掛けている、ゼロハリのビジネスバックは判るが、けっこう荷物を持っている。

「なんだい、その大きな荷物は？」俺

「これ、ランチボックスと食材、着替え」衣舞

「ランチボックスは判るが、着替えって!？」俺

「遅くなったら、泊めてね」めげず言う衣舞

こいつ、それが目的か。

「ちょっと、そこまではOKしていないわよ」瑞希

「まあ、まあ、二人の邪魔はしないから、気にしないで」衣舞

おいおい、気にならないわけ無いだろう、やられた。

あぜんとしている、二人を尻目に、荷物運び込み「ちょっと冷蔵庫借りるわね」衣舞は一部を冷蔵庫に入ると「さあ、ミーティング始めましょう」

俺たちはしぶしぶ、仕事を始めた。

途中、衣舞が農業会社の産業観覧会でもらってきた、玉露を入れる。

「美味しいお茶を飲むと、落ち着くわね」瑞希

「普通では手に入らないわ、この会社の専務さんをお願いして分けてもらったの」衣舞

「どういう、お願いの仕方をしたのだい」俺

「ないしょ！」笑う衣舞

「察しが付くけど」瑞希

“美人は得だ”を実践している、女性の場合、容姿も財産だ。

昼までに、レビューは完了、衣舞がまとめている。

その間に、衣舞が持ってきた、決算報告書を二人で確認。

「今年度は、投資が多いので、黒字化は無理だけど、来期の事業計画では早くも黒字化できるわね」瑞希

「このおかげで、毎日午前様なの知っているだろ」俺

午後1時にやっと食事だ。

衣舞がランチボックスをキッチンのテーブルに載せて中身を出している、お弁当はこれで非常に役に立つ、時間とお金の節約になる。

スープとか、ハムとかパンが入っている、高そうな食材が多いが良いのだろうか？

「経費で落とすとは言え、こんな高級食材でランチ作って大丈夫なのか？」俺

「パンもハムも、商品開発部で作った試作品、会社で栽培した小麦と大豆、けっこういけるわよ」「この辺の商品は、一般には販売されないわ、金持ち相手のネット販売と輸出用、健康食品として売り出す予定の物」衣舞

みんなで昼食を食べながら、瑞希が衣舞に話し始めた。

「もう、ここまで来たから、説明するわね」瑞希が話し始めた。

「私たちのスポンサーはタイに住んでいる、“三嶋有華”と言う人なの」

「ただ、詳しいことは判らない人だけど、親友なの」

「外人だと思っていたけど、日本人だったのね」衣舞

「一応、投資家みたいなものだけど、今回の配当削減発表で株価が下がった時に買い増ししている」瑞希

「私も、投資が出来る資産があるなら、今回の株の下落で絶対買いたと思うわ、来期の事業計画の発表したら、株高は間違いないわ、でも、私が買うとインサイダーだから無理ね」衣舞

「リーさんも、彼女の紹介でサポートしてくれているわ、リーさんが居なかったら、どうなっていたか」

「夏までに、香港で有華と会う約束をしているわ、あなたのことは、彼女に報告している」瑞希

「私も、香港行っていい？その有華さんに会ってみたい」衣舞

「一応、彼女に聞いてみるわ、ダメとは言わないと思うわよ」瑞希

「うれしい！ものすごく興味あるの、うちの会社の大株主だから、大切にしなくちゃ」衣舞

なんだか俺に何も聞かず、話が進んでない・・・瑞希のやつ、なにか自信たっぷりなのが気になる。

午後2時から7時まで、みっちり中期計画の案作り、この案はまだ修正が必要なため、全員でブレインストーミングしていくことで、意見が一致した。

「私、夕食作るから、料理趣味なの会社の経営より好き、いい奥さんになれると思うわよ」衣舞また張り切っている。

この時代、料理を趣味に出来る女性は上流階級だ、庶民はそんなことやっている暇は無い。

「すごいな、あいつ出来るのは仕事だけじゃないみたいだ」俺

感心していたら「私は、何にも出来ませんよ！」むくれる瑞希

「味噌汁作っているじゃないか」フォローになっていない俺

1時間かけて、料理が出来上がる。

「今朝、下ごしらえをしてきたから、まあまあの出来ね」衣舞

「すごい、根野菜の煮物、魚の煮付け、サラダ、卵とじスープ、ご飯、漬物まである、うまそうだな」俺

「脱帽ね・・・かなわないわね、こう言ったことは張り合っても仕方が無いし、認めるわ」瑞希

「衣舞さん、今日何時に起きたの」瑞希

「今日、5時に起きて、お弁当と、夕食の下ごしらえしたわ」衣舞

「それと、これ」一升瓶の日本酒出してきた。

衣舞の荷物は大きかったはずだ、こんな物まで持ってきたとは。

「日本酒？俺、呑んだこと無いよ、酒飲めるようになったころは食べるのも大変だったから」

「もしかして、それも貰ってきたの？」瑞希

「正解、ちょっとは苦労したけどね」衣舞

それから、しっかり食べた、こんなうまい料理は初めてだ、俺の味覚は成人してから、インスタント食品やファーストフード系ばかりだったので、こんな、家庭的な料理は縁が無かった。

初めて飲んだ、日本酒、最初は匂いが少し気になったが、すごく飲みやすい、ちょっと慣れると、フルーツのような不思議な香りと、甘いような不思議な美味しさだった。

日本人って、昔は贅沢な食生活をしていたのだと感じる、うまいのでけっこう飲んだ。

「おーい、なんだかすごく酔ってきた気がする、おまえら、大丈夫か？」俺

「さっき、瑞希なにか俺に聞いたよな、よくわからなかったけど、良いよって返事したけど、なんだったっけ」俺

なんだか、向こうで女二人が盛り上がっている・・・

あれ、IP電話しているのか、相手は？

瑞希がパソコン持って来た「元気！」パソコンから挨拶したのは・・・有華。

「やあ、久しぶり、元気だよ、今どこだ？」俺

「インドのダージリングの町に来ているわ」有華

「また、変なところにいるなー」俺

「変なところは無いでしょ、紅茶買い付けに来ているのだから」有華

「おまえ、現物もやるのか？」俺

「そう最近、農作物は値上がり激しいから、さすがに、この地方の紅茶はネットで入札できないから大変なの」有華

「へーえ、お金の匂いのするところに行くの趣味だな、おまえ」からかってやった、俺。

「だいぶ酔っているわね、人を守銭奴みたいに言わないでよ、あなた達へいっぱい寄付しているわ、怒るよ」有華

「ところで、新しいメンバーの話だけど」俺

「その話、ずいぶん前から聞いているわ、私も会ってみたいわ、今も話していたけど」有華

「良かった、文句言われるかと思ったよ」俺

「ところで、今、話し決まったけど、良いのよね？」有華

「え、何が？」俺

「まあ、瑞希がOKなので、決まり！」はしゃぐ、有華。

「おい、おい何の話だ」なにかやばそうな気がする、こいつが、喜んでいるのは絶対危ない。

「5月1日から香港へおいで、5月3日はマカオ、5日まで休暇ね、ここは会社休みだから、休めるでしょ」有華

「なんだ、その話か」ちょっとほっとした「ああ、問題ないよ」俺

「ホテルの手配と、ピックアップの手配はしておくから、飛行機便の予約をしなさい、チケットは持っているでしょ」有華

「有華にもらったのは、そのままだから、あると思う」俺

「細かいことは、メールで瑞希と衣舞にも送っておくわ、衣舞も一緒に来るわね」有華

「もう、そこまで話したのか」俺

「5月3日はマカオのホテルで盛大に結婚式しましょう、じゃあね」ピと音がしてIPを切られた。

「なんの話だ？だれが結婚するのか？」酔った頭で考えたが良く判らない。

「おめでとう、もうかなわないわね、お祝いしなくては、ちょっと車に行って、もう一本取ってくるわ」出て行く、衣舞。

「瑞希・・・これって」

ちょっと上目遣いで、俺を見ながら「私たち、結婚するの、あなたもOKと言ってくれたわ、証人は有華と衣舞」

あれ？さっきの話は、思い出した、そう言っていたような。

俺も、いつかはと思っていたから、すんなり、OKって言った、しかし、急すぎやしないか。

ちょっとはめられた気もするが、瑞希を抱きしめると、キスをした。

「あーあ、これでは部屋に入っていけないわ、寒いけどしばらく玄関で待つかないわね」衣舞がぼそっと言った。

その夜は、完全に酔っ払ったので、後のことは判らない。

香港・マカオ編

俺は、瑞希のマンションに間借りして、住んでいる。

婚約しているとは言え、プライベートは守り、別の部屋に住んでいることを強調しておく。

3月に今後の会社方針と事業計画、中期の利益予測を発表、一時低迷した株価は、大きく上昇、有華のやつ喜んでいるだろうな。

予想したとおり、食料は右肩上がり、アメリカの穀倉地帯も、水のくみ上げ規制が強くなり、最盛期の30%まで落ちている、各国でエタノール生産が増えるにつれ、食料の不足が加速している。

4月から、まだ小規模だが全ての植物繊維からエタノールを作る量産プラントが稼働している、大規模プラントは今年中に稼働する、収益率の上方修正を昨日発表したもので、今日の株価はまた上昇中だ。

4月の終わり、有華から招待状が来た、俺たちの結婚式があるので、招待状と言うのは変だが。

- ・ 5月1日 チェックイン セントラル(中環) マンダリン・オリエンタル
- ・ 5月2日 銀行、証券会社のちチェックアウト マカオへ移動 チェックイン ベラ・ヴィスタ
- ・ 5月3日 結婚式とパーティー 来る人は少ないけど豪華に行こう！
- ・ 5月4日 チェックアウト マンダリン・オリエンタルへチェックイン
- ・ 5月5日 チェックアウト 香港へ移動 帰るよ。

なんだ、このスケジュール、細かいこと書いていないぞ。

メールの内用はこうだった。

“ 結婚式当日は、黒崎会長、黒崎 衣舞 海外なので他の社員は呼べないでしょ。

リー夫妻、インド大使館員バラチャンダラ夫妻、中国商工銀行 総経理の 孫 利

葉（ソン リーイェ）夫妻。“

読んでいて、最後の人は知らないぞ？

“結婚パーティーするホテルは小さいので貸し切り、これすごいコネがいったのだぞ、感謝しなさい”

俺にとっては、あまり関係なさそうだが、なにか追いていけない世界の話のように聞こえる。

会社の休みは、4月29日からなので、旅行の準備は休みに入ってから始めた。

5泊なので、そんなに大きなバックは不要と思っていたが、瑞希がサムソナイトの中型スーツケースを2個買って来た。

服と言っても、買ってもらった（そういえばスーツは2つとも貰ったものだ）スーツ2着、着替え、日用品、瑞希もドレスとスーツでそんなに入れるものは無い。

結婚式は有華が服を用意するって書いてあった。

5月1日

今日から出かけるのは、3人、瑞希、衣舞、俺。

衣舞のおじいさんに当たる黒崎会長はマカオで会うことになっているので、3人が衣舞のプリウスに乗って、空港まで行く。

俺と瑞希は初めての海外だ、日本破産前は一般の人でも海外旅行は簡単に行けたのだが、今は料金が高くて金持ちしか行けない。

空港のチェックインカウンターでちょっと揉め事が起こった。

大した、ことではないのだけれど。

“大したことよ”衣舞

ナレーションは今、俺がやっているのに、介入するなー。

チケットは、端末に登録してあるので、読取り機にかざし、パスポートも国内では同じく読取り機にかざすだけでOKだ。

ただ、席の確認があるので、聞かれる「こちらのお二方は、隣同士の席をビジネスでご利用いたしました」「そちらの方は、エコノミーですね」航空会社の人が出た。

「あなた達の、チケット、ビジネスなの？私は、会社経費扱いだけど、エコノミーなのよ」ちょっと怒っている、衣舞

「私はあなたの秘書なのだから、ビジネスにさせなさいよ」って俺に言っているのか、衣舞。

「それは、経理に言ってくれ、俺がOKって言えないだろう」

「一応あなたは専務なのだから、大丈夫よ、OKね！」衣舞

俺がひるんでいるうちに、彼女は会社の端末出して、アップグレードの手続き頼んでいる。

「それでは、3名様、ビジネスでお席をご用意させていただきました」少し笑いながら、搭乗券を渡してくれた。

国内なら全て端末上でデータ転送だが、海外では無理なので、搭乗券とパスポートは昔と変わっていない。

歩きながら「ちょっと、経理から文句言われるのは俺なのだけ、それに今回は俺たち、プライベートなのだから」

「私は仕事なの、いつもぼけかましてる専務のお守」衣舞

「ひどいなー、来いって言った覚えはないぞ」俺

「まあ、いいじゃない、飛行機の中も多の方が楽しいわ」瑞希、特に余裕である。

イミグレーションを通り、国際線の搭乗口フロアーに来ると、衣舞が「ラウンジ行きましょう、無料でお酒飲めるわ」こいつ、これが目的か。

衣舞は、日本破産前は、海外へ行ってたから、俺たちのようなお上りさんとは違う。ここから先は添乗員と思って、任せよう。

航空会社のラウンジで搭乗券渡して、チェック用の端末に通して確認「お飲み物と軽食はフリーになっております」係りの人に言われラウンジに入る。

席に座ると、衣舞が「コロナビアでいい？」答えるまえに、取りに行ってしまった。

「やれやれ、本当はお嬢様なのだよな彼女、今でも日本の生活レベルから考えたら、資産家の娘だ」俺

「本当だったら、対等に話せない人たちばかり、あなたが有華と会っていなかったら私は貧乏公務員のままだった、いや、もっと悲惨なことになっていたのよね」瑞希
衣舞が備え付けのトレーにビールとグラス、おつまみを持って帰ってきた。

「軽く飲みましょう、未来の花嫁と新郎に、乾杯」衣舞

搭乗30分前になり、航空会社の案内の人がラウンジに確認に来る。

搭乗手続きは、優先で機内へ。

窓際に瑞希、通路側に俺、通路を挟んで衣舞。

飛ぶ前に、おしぼりとシャンパン、飛んだらすぐ前菜のようなおつまみと、シャブリーのワイン。

初めて飛行機に乗るのだから、とまどっていると、衣舞に言われた。

「エコノミーだったら、こんなにサービス良くないわよ」

チエクラブコック香港国際空港(機場)まで4時間半、香港時間午後1時には到着する。

飛行機を降り“Arrival”の表示に従って、移動用のシャトルトレインに乗り旅客ターミナル・トランスポートーション・センターまで移動。

イミグレーション(入関)では飛行機内で貰った出入国カードに記入した物とパスポートを出し、入国審査は完了。

バックッジをベルトから取って、税関を通り、ここでは申請する物がないのでフリーパス。

有華と待ち合わせは、エアポートエクスプレッスライン(A E L)のカウンター。

そこまで歩いていくと、成田で会った時と同じ格好の有華がいた。

「はい、裕也、同じ格好のほうがわかりやすいと思って、同じ服着てきたわ」

「そちらが、衣舞さんね、こんにちは、なるほど美人ね、モデルさんみたい」「裕也が気にするわけね」有華

「両替しなくていいって、言ったからまだしていないのだけれど」瑞希

日本国内では、電子マネーしか発行されないの、普通はTC(トラベラーチェック)を使用するか成田で両替する。

「問題ないわ、3人にこれを渡しておく、オクトパスカード」有華

「なんだい、それ」裕也

「1997年から導入された、プリペイドカード、今では香港全ての乗り物・買い物で使えるわ、とりあえず、2万HK\$入金してある」有華

(注：2006年では、ほとんどの交通機関とコンビニなどで使える)

「エアポートエクスプレスライン(AEL)で行きましょう」有華

(注：朝6時～深夜1時まで、4分～8分間隔で走っている、23分で香港駅に行ける、駅から歩く距離を考えると、エアポートバスの方が主要ホテルで止まるので時間がある人は安くて楽です、エアポートエクスプレスラインの駅はMTR(地下鉄)の駅と近くでつながっていないので、タクシーか、各駅からのシャトルバスでホテルに行くことになります)

「ホテルは香港駅にまあまあ近いから、400mぐらい歩くよ」有華

空港の建物から直接エアポートエクスプレスラインの駅につながっている、オクトパスカードをセンサーにタッチ“ピッ”と音がしてゲートを通り抜ける、切符を買ったりする必要はない。

広い車内で、バケツ置く場所にも困らない、確実に時間を把握できるので、急ぎの人には便利だと思った。

「成田なんかより、ものすごく便利ね」瑞希

「東アジアのハブになっているから、よく出来ているわね、最近は日本経由便ってほとんど無いわ」有華

香港駅(終点)で降り、ホテルまで歩く、ほとんどショッピングモールの中を歩くので、そんなに苦にならないが、5月の香港は日本に比べ暑い、有華以外は汗だくになった。

ホテルのチェックインカウンター

“チェックイン、お願いします”英語“これが、予約No.”電子ペーパーを見せる有華。

“承っております、皆さんのパスポートを見せてください”レセプション

“お支払いは?”レセプション

“このカードで、全員分”有華

“今は、確認だけです”リーダーに通してからカードを受け取る。

“みなさん、オクトパス持っていれば、部屋のキーコードをオクトパスのコードで登録しますがお持ちですか、もし無ければ、キー専用カードお渡しします”

「みんな、さっきのオクトパス別々に渡して」有華

オクトパスのコード No.は世界に一つしかないの、キーとか入門確認に使える、このホテルでは、ドアのセンサーにかざすだけで、部屋のキーが開く。

(注：個別のコードを持っていることは本当ですが、キーとして使っているホテルは今現在はありません、近い将来こうなると思います)

“みなさんのカードは登録が終了しましたので、オクトパスでドアのキーを解除してください”レセプション

「部屋は全員別々、ダブルルームよ」有華

「え、そうなのか」俺

「不満？結婚式前でしょ、明日以降のホテルはスイートだから我慢なさい、べつにケチったわけではないのよ、日本と違ってホテルの料金は部屋チャージだから」

「部屋に行って、少し休憩したら、ヴィクトリア・ピークへ行きましょう、5時にロビー集合、いいわね」有華

さっさと、エレベーターホールに行く有華。

「聞いたとおり、豪快な人ね、もっと年取った人だと思っていた、若いわね、私たちと同じくらいかな」衣舞

「また、振り回されないようにしようとは思っているけど、彼女は悪いようにはしないさ」裕也

「信用しているのね」衣舞

「あいつには、俺たち世話になりっぱなしだ」俺

「そうね、感謝しなくちゃ」瑞希

シャワー浴びて、着替え少し休憩してから、ロビーに行く。

「みんな、そろったわね、ここでちょっと紹介するわ」有華

有華の隣に、俺と同じくらいの背丈の中国人？が居た。

「彼の名前は、孫 龍陽(ソン リュウヒ)、4年間大学で一緒だったの」「今回、結婚パーティーに招待した“孫 利葉さん”の息子になるわ」有華

「よろしく、結婚式は楽しみにしている、それと今日は皆さんを夕食に招待することになっている」流暢な日本語で話す、龍陽。

「この2人が、裕也と瑞希、今回の主役、こちらの女性が衣舞、裕也の秘書」有華が紹介する。

挨拶をして、移動。

「フェリーのバスターミナルまで、歩くわよ」有華

「おまえ、バスで行く気か？」龍陽

「あたりまえでしょ、この人数だったら、タクシー2台要るし」有華
「いつもだけど、変なことにケチだな、お金持っているくせに」龍陽
「サービスと料金は対価、つりあわなければ払う価値無し、あなたもそうでしょ」有華

15Cのバス停で並んでいると、香港では有名な2階建てバスが数分で来た。
このバス、2階部分がオープンだ、気持ち良さそう。

「さっさと乗って、2階席へ行くよ」有華
オクトパスで乗る時清算、“ピッ”でOK、便利である。

2階席は、香港のビルの照明がきれいに見える、風も日が落ちているから、気持ちがいい。

「10分くらいだけど、ケチでは無いでしょ」有華
ヴィクトリア・ピークのピーク・トラム乗り場で、切符買うのに大声で文句言っている韓国人を尻目に、さっさとオクトパスでゲートを通りトラムに乗り込む。
急な勾配を8分ほどで、頂上へ着く。

「うわー、これが有名な香港の夜景か」裕也

「今の日本人は、こんな近い観光地も簡単に来られないわね」瑞希

「私は2回目、小学生の時に来たわ」衣舞
みんなで、オープンテラスでお茶を飲む。

「龍陽さん、有華って大学時代どんな人でした」裕也

「こら、私の過去を聞くなー」有華

「それなら、エピソードを一つ」有華がにらんだが、龍陽は話し始めた。

「3回生の時、有華を本土の家に招待した、普通、女性を家族に紹介するのは特別なことが多い、将来のパートナーとして良いと思ったから」龍陽

「それって、婚約ってこと」瑞希、衣舞も乗り出した。

「その話は、もう終わっているから止めといたら」有華

「夕食会で、両親と親戚が集まり、有華かこんで、飲んで食べた」龍陽

「その時の有華はすごかったな、会話もすごかったが、私が食も飲みも負けてひっくり返された」龍陽

「両親と親戚は、彼女を認めて、家族にしても良いと許可貰った」龍陽

「でもね、彼女まだ早すぎるって断ったよ、私の家族は待つと言ったけどね」「今回のマカオ、母が少し期待しているのだが、どうかな？」龍陽

「私は、ビジネスパートナーを紹介するだけで来の、過剰な期待は無し」有華

「冷たいな、私の家族は諦めていないよ」龍陽

「その話は、また今度」「さて、これからが本題、3人ともよく聞いてね」有華

「今日の夕食に、彼のご両親から招待を受けているわ、ここで絶対気に入られること、失敗は許さないわよ！」有華が脅かす。

「3人って、私も？」衣舞

「あたりまえよ、あなたも関係者だから」有華

「また、なにか企んでいるな、教えてくれないのか？」裕也

「まずは気に入られないとね、詳しくはそれから話すわ、やることは簡単よ、乾杯したら絶対飲み干すこと、出てきた食べ物は全て食べることに、これだけ」有華

「食事って、中華料理か？」裕也

「そう、普段は絶対食べられない料理のコースになると思うわよ」有華が笑った。俺は喜んで、行くことにしたのだが、甘かった……

ホテルに戻り、みんな着替えて、ホテルのロビーへ、今度は車が迎えに来ていた。

一応、男性はスーツ、女性は持ってきたドレスで行く。

20分ほど走り、レストランだと思うが、個人宅のような構え。

「普段はあまり使っていないけど、香港の別宅だよ」龍陽

中に入ると、食堂へ案内されて円卓に座った。

龍陽が両親、彼の妹、親戚を4人紹介、有華が俺たちを紹介すると、食事が始まった。

“有華、よく来てくれました、そろそろ家族になる決心はついたのかい” 広東語で龍陽の母親が聞く。

“ありがとうございます、まだ私はやりたいことがあります、時間が経って私が変わってもご理解いただけるのなら、そのときは” 有華

“まだ、待ちましょう、あなた達は若いから”

俺たちは、かわるがわる乾杯に来る人たちと挨拶をして、紹興酒や白酒(パイチュウ)を飲み、出てくる中華料理を平らげた……いや、凄い量で死にそうになってきた。

有華が絶対に断るな、飲んで食べると言うのは、こんな大変なことなんて、いまさら後悔したが遅かった。

白酒も凄く強い、もう、だめだ……横の有華は、豪快に飲んで食べている。

何回か、席を外しているようだが、どこにそんなに入るのだ？あいつ同じ人間か？

瑞希も衣舞も死にそうな顔している。

俺は、何十杯目の酒か判らない乾杯した後、記憶が飛んだ。

「起きなよ、時間だぞー」まぶしい、目が覚めた。

「頭ガンガンする、寝かせておいてくれ、その前に水……」死にそうな、俺。

目を開けると、目の前に有華が居た。

どうやら、ホテルの部屋らしい。

「今、8時だから1時間後、香港上海銀行へ行くわよ、支度をしなさい」有華は元気なようだ。

「かんべんしてくれ、死にそうだよ」俺

「死なないわよ、しゃきっとしなさい、シャワー浴びるの手伝ってあげようか？」有

華

違和感を覚えてシーツの下を、俺なにも着ていないじゃないか。

どうなっているのだ「おまえ、なにもしなかったろうな」俺

「なによ、女性に言う、男のせりふではないわよ」有華

「ひっくり返ってから、ホテルまで連れて来て、バスルームで凄いことになったの覚えていない？」有華

「服脱がせて、シャワー浴びさせて、掃除大変だったのだから」有華

「瑞希と衣舞は？」

「同じようなものよ、私は一晩中みんなの看病で寝ていないわよ」有華

こいつ、スーパーウーマンか？

「ん！みたなお前」俺

「酔っ払いのを見たって、なんとも思わないわ」有華

「いたた、水くれ」これ以上は反撃しても、頭痛いだけだ。

「本当はホテルのスタッフに頼んで、全てやってもらったの、チップはずんでおいたわよ、あなたのオクトパスでね」有華

水を飲んで、シャワー浴びながら、シャワールームの外にいる有華に聞いた。

「瑞希と衣舞は今何している」俺

「今、シャワーあびて、着替え中よ、女性だから少々手加減してもらったし」有華

「俺は、手加減なしか」

「まあ、合格ね、赤点ぎりぎりだけど」有華

「しばらくは、酒は見たくないな」

「だめよ、今夜と明日はあなたが主演」浮かれる有華

「しかし、おまえ、人間か？俺より飲んで食べたろう」

「種を明かすと、アルコールは回る前に、もったいないけど戻したの、食事もそう、昨晩は4回戻したわ」有華

「精神力要るわよ、内臓吐き出す気分だから、昔、血を吐くまでやったことがあるわ」有華

「そこまでする必要があるのか、体壊すぞ」俺

「必要な時はね、中国人と付き合うときは必要よ、人の繋がりと礼儀を重視するから」有華

「さあ、9時にロビーへ来て、私も着替えてすぐ行くわ」有華

ロビーでは、有華以外、顔がさえない、みんな青い顔している。

「さあ、銀行行くわよ、忘れ物無い」有華

・ パスポート

・ 英文の住所照明

「これだけ、お金はとりあえず、私が振り込むから、貸しよ」有華

香港上海銀行は、グランドフロアーから3階へエスカレータ1本、受付で有華が「プレミア」カード出して、話している。

案内に付いて、5階の応接ルームへ行く。

通常は、3階のブースで口座開設だが、有華の関係で、5階のプレミアルームらしい。ソファに座り、銀行員が名前、住所、パスポート番号、必要な内用をコンピューターに打ち込む。

「最初から、プレミアにするよ、プレミア無料のゴールドクレジットカードの年間会費を考えたら、こちらの方が得だから、当面のお金は、口座番号が確認でき次第、ここで、私の口座に登録して、送金するわけど、今要る分はここで卸して現金で支払うわ」

「5万HK\$で、無期限のタイムデポジット(定期預金)を組むことになるわ、香港で収入証明が取れない外人の場合、保証金のようなものなの」

「投資口座も必要だから、3千USドルだけインドファンドを買うわ」

「今から、ファンドマネージャーがアンケートと、リスクについて説明するから、聞いてね」

勝手にことが進んでいる。

「ところで、なんで衣舞まで?なんだ」俺

「有華さんとは、メールで話が付いているわ、私の預金はアメリカの両親から、振り込まれるの、私を仲間はずれにする気?あなたとは普通の関係じゃないでしょ」衣舞

「ひと言多いぞ、変な誤解受けるじゃないか」俺、危ない発言は頼むから止めくれ。

「普通じゃない関係って?説明して」瑞希

「そ、そう、専務と秘書の関係」衣舞が笑いながら言う

「なにか、納得行かない気がするけど」瑞希

「まあまあ、痴話喧嘩は結婚してからにしてね」有華

ATMカードをその場で受け取り、もらった封筒のピンナンバーでATMへログイン、ピンナンバーを自分の暗証番号に変更、6桁である。

備え付けのパソコンで、ネット認証、口座番号と電話のピンナンバーでログイン、IDネームを自分で決めて8桁以上で入力、新パスワードを6桁で打ち込み終了。

セキュリティーデバイス(トークン)は郵送、クレジットカードは手数料払って書留で送ってもらうことにする。(クレジットカードは出来上がりの手紙が来てから、窓口まで取りに行くのだが、交渉しだいで送ってくれる。)

「ここは終了、さあ次へ行くよ」有華

みんなは、頭いたいので我慢して付いていく、歩いて言わないだろうな・・・

「セントラルからは、MTR（地下鉄）で移動、これもオクトパスでOK」さっそうと歩く元気な有華。「まってくれー」全員

Phillips 証券会社では日本人スタッフと、アポが取れているのですぐ手続き、先ほどの銀行の口座番号とパスポート、銀行で作ってもらった口座証明でOK、郵送でも証券会社の口座は開設可能だが、パスポートコピーなどにするサイン証明が必要なので、窓口が便利である。

証券会社の人の前でサイン、同じ書類にその証券会社の人がサインしてくれれば、サイン証明はいらない。

昼前に、口座開設完了！

「さあ、食事に行く？」有華

「勘弁してくれ、まだ胃がむかむかする」裕也

「仕方が無いわね、お粥食べて、チェックアウト、マカオへ行くわよ」有華

3人はげっそりしながら付いていった。

やっぱり、有華と付き合うのには、常人では不可能なようだ。

気力を振り絞り、お粥食べ、チェックアウト。

フェリーの側のビルまで歩く

「もしかして船か？やめてくれ、また気分悪くなりそうだ」俺

他の2人も、賛同する。

「大丈夫、ヘリで行くから、20分の辛抱よ」有華

耳を疑った、ヘリってヘリコプター？

「少々揺れるかも知れないけど、短時間だから我慢してね」有華

（注：香港セントラルからマカオまでヘリコプターで20分、ヘリで国境越えるのは、香港マカオぐらいです、飛行機では近すぎて飛べません、香港もマカオも中国へ返還されているので、国境とは言わなくなるかもしれません）

マカオに到着した時は、心底ほっとした、20分が2時間にも感じられたと言ったら、大げさだろうか。

ホテルまで、リムジンで移動、ベラ・ヴィスタへチェックイン部屋は8部屋しかないが、全てスイート、今回は瑞希と倒れこむようにベッドにひっくり返った。

有華と衣舞は同じ部屋にしたらしい、ベッドルームが2部屋あるので問題ない。

午後4時に、有華と衣舞が俺たちの部屋にやってきた。

「気分はどう？」有華

「まあ、なんとか、50%くらいの元気だ」裕也

「今晚は、明日のために、手加減しておくわね」有華

またいやな予感がする。

「明日は、2人とも主役なのだから、昨日より凄いわよ」有華

「それ、まじかよ！助けてくれ」俺は真剣に頼んだ。

「死なない程度にはするから、がんばってね」有華

「それって、拷問人の言い方じゃないのか？おまえ、サディストか？」真剣に逃げ出したくなった。

「冗談よ、せっかくの初夜が台無しになるものね」有華

「今日は、せっかくマカオに来たのだから、すこし観光しよう、ミニモークをレンタルしているから、それで行くわよ」有華

「ミニモークってなんだい？」裕也

「小型の車、ゴルフカートを大きくしたようなイメージすれば判る、国際免許要るから私が運転手」有華

ホテルの玄関に行くと、ゴーカーのような車が止まっていた、スタッフに持ってきてもらったらしい。

「かわいい！」衣舞

「後ろの席、せまいな、これ」裕也

「気にしない、そんなに距離走らないし、瑞希とならべったりでも良いでしょ」有華

「お前ら、前に乗るのだろ、そんなミニスカートだとパンツ見られるぞ」からかう裕也

「男はみんなスケベだね、見とれていると、瑞希逃げちゃうぞ」有華

女3人、男一人の変なグループは、有華の運転で観光地へ。

夕方、6時にホテルに戻る。

「さあ、シャワー浴びて着替えて、着替えは部屋に用意させている、裕也はタキシード、私たちはチャイナドレス」

「食事をするついでにカジノへ行こう、雰囲気を楽しみに行きましょう」有華

「俺はギャンブルやったこと無いから、見るだけにしておく」

着替えてしばらくすると、ホテルリムジンが来たのでボーイが直接連絡に来る、やばな電話はこのホテルには似合わない。

有華は黒に金系のドレス、瑞希は真紅に金系、衣舞は紺（ウルトラマリンブルー）に銀系、スリットから見える足が悩ましい、俺は黒のタキシード。

リスボアホテルの入り口で、この3人を連れ立って降りると、同じような人たちが多いとは言え、けっこう目立つ。

瑞希をエスコートして、後ろ左右に有華と衣舞がついてくる。

レセプションで“予約した、信条と言いますが”有華は気を利かせて、俺の名前で予約している。

“係りの者が案内しますので、お待ちください”レセプション

しばらくして、案内の人について、ポルトガル料理のレストランへ。

4人の席なので、隣に瑞希、正面に有華その隣に衣舞。

このグループは、はたから見たら、なにに見えるのか？みんな20代前半だから、友人の集まりかな。

だけど、3人の女性に囲まれているのは、悪くない気分だ。

「ところで、ずっと気になっていたのだけれど、有華、聞いていい、私たち海外に来てから、一銭も出していない、有華に頼りっぱなし、大丈夫なの」衣舞が言い出した。

「気になる？」有華

「気になる」みんな

「それなら、食べながら少しだけ説明しよう」

「オーガニックフードが、配当をやめた時、株価が40%下落したわね、その時、買えるだけの株を買ったの、今の株価は？裕也答えて」有華が質問する

「あのときから、3倍になっている」裕也

「今回の費用とあなた達の口座のお金は、ちょっと手放した株のキャピタルゲインなの、儲けさせてもらった、お礼」「ただし、今後株価下落させたら、即刻、首にするわよ」有華

「有華が言うと、冗談に聞こえないよ」裕也

「こんなこと冗談で言えるわけ無いでしょ、ビジネスには私情を挟まないわ」有華

「それくらいまじめにやりなさいってこと、2人も優秀なブレイン抱えて、業績を落とすようでは、私が見込んだ男じゃないわ、がんばりな」ちょっと怖い有華

「明日は、もっと面白い話するから、期待してね」微笑む有華・・・また心配が増えた、こいつが面白いのは危険だ。

「昨日は、最初凄く美味しかったけど、途中から苦痛だったわ、今日はそんなこと無いわよね」瑞希

「今日は、普通に頼んであるから、問題ないと思うわ、ワイン飲む」

有華はワインリストを見ると

「キングダドコット グランデエスコリアをフルボトルで、これはスパイシーなポルトガル料理に合うわよ」

「なんだ、キングダドコットとか言うワインって」裕也

「このワイン珍しいわよ、日本ではなかなか飲めないと思うわ、樹齢25年以上のトゥリガ・ナショナル種からビンテージの年だけに仕込むの」有華

「ワインも詳しいのか？」裕也

「ワインも投資の対象になるので、勉強しているわ」有華

「投資って、この前、紅茶も同じようなこと言っていたな」裕也

「そう、しいて言えば、あなた達も投資対象なの」笑う有華

「有華と話していると変な気分になりそうだ、どこまで本音が冗談か？おまえ、お金が恋人ではないのか？」裕也

「失礼ね、私の恋するものは人とのネットワーク、お金は手段」有華

「だめだ、哲学のようについていけない、俺は平凡な人間だよな」

「人生、地道に楽しんでいこう、裕也、今楽しいだろう」有華

「それは否定しないよ、明日は瑞希との結婚式だ」となりの瑞希を見る裕也
頬を少し赤くした瑞希「照れるわね、有華の投資対象でもかまわないわ、夢のような
ことになっているのだから」

「そう、文句言ったら、罰が当たるよ、私なんか羨ましくて仕方が無いのに」衣舞
楽しく食事の後、カジノへ出かける。

同じホテルの中にあるから、時間はかからない。

「私はほとんどギャンブルやらないけど、遊びだから、1万元(HK\$)チップ配る
わ」有華はカードで4万元分のチップを買おうとみんなに渡した。

(注：マカオは昔から、HK\$でもOKだったが、返還後元もOKとなっている)

「裕也と瑞希は離れないでね、衣舞は問題ないよね、アメリカに住んでいたぐらいだ
から、私は適当、1時間後ここのテーブルで、会おう」有華

俺と瑞希は、よく判らないので、簡単なルーレットで、少しずつやってみることにし
た。

何箇所かに分けて、張っているが、なかなかプラスにならず、チップは減っていく。

「やっぱり、ギャンブルの才能はないな」俺

そこへ、有華がチップ抱えてやってきた。

「バカラで、1万元稼いだから、ここで最後にするわ」

有華は、ルーレットが回ると2万元を全て赤に置く、大胆だなこいつ。

玉はみごとに、赤。

「やった、これで終了、さっきのテールで飲んでいるから」有華

俺たちは今回はずれ、もうほとんどチップ無くなった。

少し歩いてみると、衣舞が居た。

どうやら、ブラックジャックをやっているらしい。

ものすごく真剣にやっている、周りで男どもが見物しているのはなぜ？

横へ行くと、このテーブルものすごく盛り上がっている。

衣舞はチャイナドレスのスリットから長い足をあらわに、カード見ている。

彼女がカードを開けると、「おー」周りがどよめいた。

「そこに置いてある、3枚のチップは金色だけど、いくらなの？」瑞希

「一枚1万元」目が据わっている、衣舞

ディーラーが、金色のチップを3枚出して、横に置く。

6枚のチップを取り上げると「やーめた、疲れたわ」衣舞

どうやら、俺と瑞希は彼女達に比べると才能ないようだ。

3人で有華の待つテーブルへ行くと、有華はソーダ水飲んでいる。

「なにか飲む、飲み物は無料よ、でも、ウエイトレスにチップ渡さないといけないか

ら、無料とは言えないけど」有華

みんな、水を頼むと、戦果報告。

「俺と瑞希は、2人で2千元しか残っていない、惨敗」

「私は、出したお金分は回収したから、イーブン」有華

「私、6万円になった、ブラックジャックは得意だけど、ここまで勝ったのは初めて」
衣舞

「すごいわね、明後日は香港へ戻るから、買い物して帰ったら」有華

「日本新円に換算すると、900万新円・・・年収の3年分？」衣舞

会社がうまく行っているからと言って、俺や秘書の給料がべらぼうに高いわけではない。

俺は、運転手のころの3倍貰っているが、よく考えたら、有華が最初に渡したチップの金額は運転手のころの年収だった、金銭感覚がおかしくなっている。

最初、有華に会った時、“金銭感覚おかしく無いか？”って聞いたのを思いだした。

「チップお金に換えて、ホテル帰ろう、HK\$にしておくと便利よ、元もHK\$も同じだけど」有華

ホテルにリムジンで帰ってくると、ウエディングドレスが届いていた。

「明日は、ホテルのパーティールームで、式とパーティーを行うわ」

「式は、友前結婚式、みんなの前で誓ってもらう」

「その後は、気兼ねなくパーティーしましょう、私からのプレゼントはその時ね」

「瑞希、衣舞、午前10時に美容師と着付けの人が来るから部屋にいてね、裕也も同じ」有華はいつものように、一気に話す。

しばらくしてから解散、各自部屋に戻った。

横で眠る瑞希を見ている、すごい勢いでここまで来た。

こんなに、うまく行って良いのか？

本当に結婚して良いのか？

瑞希、お前は後悔していないのかい？

俺は？

有華はなんで、こんなに肩入れするのだ？これって前にも同じこと言っていた気がする。

結婚式の前の男って、こんなこと考えるのかな？

なにか、後悔しているのか、俺？

愛しているのは瑞希、お前だけだよ。

有華も衣舞のいい女だけど・・・

・・・最後の行はカットしておこう。

朝、食事をしてから、けっこう時間があつたが、黒崎会長、リーさんや、バラチャン

ダラさん、龍陽、龍陽のご両親と挨拶したりしているうちに、すぐにお昼だ。
瑞希と俺は、両親いないからちょっと寂しい、俺たちの親にも、こんな結婚式見せてやりたかった。

有華がビデオカメラとパソコンを部屋の片隅にセットしている、ドレスに似合わないヘッドセット付けて、マイク持っている、またなにかやる気だな、俺には理解できないことばかりやるので、干渉しても仕方が無い。

俺は、白のタキシード、有華はグリーン系のドレス、衣舞はブルーのドレス。

もちろん、瑞希は純白のウエディングだが、まだこの部屋に来ていない。

しばらくして、瑞希が黒崎会長にエスコートされて、階段を降りて来た。

瑞希も親がいないので、黒崎会長がこの役をやることになった。

“ みなさん、ようこそ、信条裕也と吉田瑞希の結婚式へ来ていただき感謝します ” 有華が英語で話し始めた。

“ 最初にお願いがあります、全員ここで、名前を言って下さい ” ビデオカメラの前を指す。

“ 先に説明しますと、ビデオカメラと音声は記録され後ほど皆さんに配布いたします、目的は皆さんの承認によって結婚式が行われたことを公式なファイルとして残すためです ”

“ 裕也と瑞希おいで ” 有華

俺がマイクで喋る前に、有華がなんかヘッドセットに話している。

(H A Lスタンバイ・・・スタート、信条裕也として声紋記録、画像認識・・・)

気になるが、自分の名前をマイクに話す、次に瑞希の時も。

(スタート吉田瑞希として声紋記録、画像認識)

全員が終わると、また、2人が呼ばれた。

「結婚指輪、忘れてきていないでしょうね」有華

「ここにあるよ」俺

(H A L , ここから結婚式として記録)

「さっきから、なにに話しをしているのだい」俺

「この結婚式を記録する、タイのサーバーコンピューターH A Lと交信しているの」
有華

(H A L、前、2項目削除) 有華

もう、まかせよう。

“ 信条 裕也、あなたは瑞希を伴侶として認めますか ” ここから、英語、有華

“ 認める ” 俺

“ 吉田 瑞希、あなたは裕也を伴侶として認めますか ” 有華

“ 認めるわ ” 瑞希

“ では、指輪を交換して ” 有華

ぎこちなく、指輪を交換する俺たち

“では、キスして”有華

俺は、瑞希の唇にそっとキスをした。

みんなが拍手。

“私はこの2人が結婚したことを認めるわ”有華

その後、全員から祝福を受けて滞りなく、式は終わった。

結婚式は教会での結婚とか神前結婚をイメージしていたが、居るか判らない神様に誓うより、良いような気がする。

“ここで、私から2人にプレゼントがあるわ”有華

もう、香港の口座お金もこのパーティーもすべて、有華から貰ったのに他に何があるのだ。

“香港に会社を一つ作ったの、出資者は孫 龍陽と私”“中国でも今日本で始めた植物繊維から作るバイオエタノールの仕事をあなた達にやってほしいの、株式として上場できるようになったら配当でもらうけど、当面は利益の1/3だけちょうだいね”

“バックアップは孫一族がやってくれるわ、絶対成功する”

「日本の会社と香港の会社、仕事が2倍になって大変だけど過労死しないようにがんばってね、さあパーティー始めよう」有華の笑顔の裏には・・・

「まてー、もしかしてまた、だまされている気がしてきたが・・・」考える暇なく、乾杯攻めに合う俺、どうにでもしてくれ状態だ。

「衣舞、裕也のバックアップお願いね、あなたにも経営権あげるから」

「あなた、何者なの？初めて会った時から、すごいことばかりであり疑問を持たなかったけど、普通の常識を超えているわ」衣舞

「衣舞、あなたは自分で会社経営したかったのでしょうか、日本の会社はこれから多くの利益を出すわ、利益は香港の会社を経由してあなたの口座にも入れる、今の法律は外資に有利になっている、私は持ち株を手ばなしてもいい」

「そんな、私は・・・信用されていいの？」衣舞

「今回の結婚式で会ったメンバーは、家族のようなもの、信用するわ、ただ裏切った場合は想像に任せるわ」有華

「今の言葉だけ聞いたら怖くないけど、3日間付き合った後では、少し怖いわ」衣舞

「私は優しいから、心配しないで」有華はパーティーに戻っていった。

マカオ最後の日は、昼まで瑞希と寝ていた、疲れた、昼食も部屋まで運んでもらって、朝から2人きり、日本では同棲のような生活だったのだが、やはり、なにか違う。

午後2時に有華が来た「いつまでいちゃついているの、そろそろ、香港に行くよ、他のお客さんは、もう帰ったから残っているのは私達だけ」

ホテルから空港まで移動、帰りもヘリコプターで帰る。

「来る時は、景色見ている余裕がなかったけど、今回は良さそうだ」裕也
全員ヘリに乗り込んで、安全ベルトをする。

「ところで有華、龍陽ってお前の彼氏だろ」裕也

「大学時代からの友達よ」有華

「龍陽の両親が、お前に家族になるように言っていたらさ」裕也

「あなたは、広東語喋れるのだったわね」有華

「今回、なんで同じ部屋か単独で泊まらなかったのだい」裕也

「考え方の違いよ、彼らの場合処女性を重視するし」有華

「お前、処女か？」裕也

「こら、女性に面と向かって何てことを聞くのだ、ここから叩き落すぞ」有華

「いいこと聞いた」はしゃぐ裕也

有華もちょっとはかわいいじゃないか、俺はなんとなくほっとした。

「もう、口きいてやらない」有華

マカオの町と香港の町を上空から眺め、景色を楽しんで、香港のヘリポートに到着。
セントラル（中環）マンダリン・オリエンタルにチェックイン。

「今回は、裕也と瑞希はスイートだから心配しないでね、日本は少子化だから、がんばりなさいよ」有華

「お前に言われたくない」裕也

「さて、明日のチャックアウトまで自由行動、新婚は2人きりにしてあげる、衣舞は
買い物に行くのでしょ」「私は、デートでもしてくるから」有華

この日は全員、適当に別れた。

俺たちは、有華にもらったオクトパス使って、香港を歩いた、買い物もオクトパスで
OKだったし、食事もしんない高そうでないレストランで食べた。

ホテルに戻り、部屋のソファで瑞希と座る。

日本の現状と比較すると、別世界にいる、明日帰って明後日から仕事だよな。

今日までの4日間は、人生でもっとも充実した4日間だった。

隣の瑞希を抱きしめた。

翌日の朝も、ルームサービスにしようかと思ったが、朝9時でまだ間に合いそうだった
のでホテルのレストランへ行って朝食。

チェックアウト、有華はもう1泊するので空港まで付いてきてくれることになった。

ホテルから、香港駅まで移動、ここで先に飛行機のチェックインを駅で行い、機内持
ち込みのバックだけで身軽だ。

衣舞は、すっかり帰りのチケットもビジネスにしてあった。

経理に怒られるのは俺だぞー。

オクトパスカードを使って、エアポートエクスプレスライン（AEL）に乗り込む。

23分ほどで、空港に着く。

「これからよく香港に来ることになるから、オクトパスカードは持っていくといい」

「3年間は使わなくても、中の金額OKだから」有華

「本当になんて言って感謝して良いのか、言葉が無いわ」瑞希

「俺も、なんて言って良いのか、本当にありがとう」

「私も、ものすごく感謝しているわ、3人で会社盛り立てる」衣舞

「今度は3人でタイへおいで、ただし今度は自費で来なさいよ」有華

「ああ、必ず行くよ、待っていてくれ」裕也

「裕也、仕事ばかりでなく家庭も大切にするのだぞ」有華

「お前からそんな言葉を聞くとは思わなかった、人の仕事を2倍にして、本当にそう思っているのか？」裕也

「出来るわよ、有能な仲間がバックアップしてくれるから、みんなを大切にすることを忘れないでね」

「また、みんなで飲もう、約束よ！」

“ Good-bye” & “ See you again”

あとがき

前の、Welcome to my lifeが日本の没落をテーマに書き始め、暗い話では全然面白くないと思い、パワフルな女の子有華を主人公にして、常識はずれな日常生活へ巻き込まれていく、普通の若者を書いてみました。

日本破産では、インフレ率がすごく大きく書いてありますが、そこまで行かないと日本の負債は減りません。

続編はアクシデント無しに進めたのですが、こちらは裕也が主人公です。

登場する女の子(女性)はみんな優秀で、美女、この点は作者の好みで書いています。

ちょっと、ことがうまく行きすぎな点は小説ですので。

日本の会社編は10ページほどで、香港・マカオ編へ行くつもりでしたが、まじめにつじつまを合わせて行くうちに、けっこうなページになってしまいました。

香港で口座を作る話は、今の香港で同じことが出来ます。

これは、キャピタルフライトを薦めているのではなく、リスクの分散と言う意味で書きました。